

TOHOKU GAKUIN ARCHIVES

# 東北学院資料室

LIFE

LIGHT LOVE

Vol. 12

2013.4.1



## 寄稿

登録有形文化財 デフォレスト館  
— 仙台に現存する最古の宣教師館

志子田 光雄

(昭和19年4月開設)

幻の東北学院航空工業専門学校校則について

鶴本 勝夫

## 所蔵資料紹介

草創期の「東北学院報告」草稿

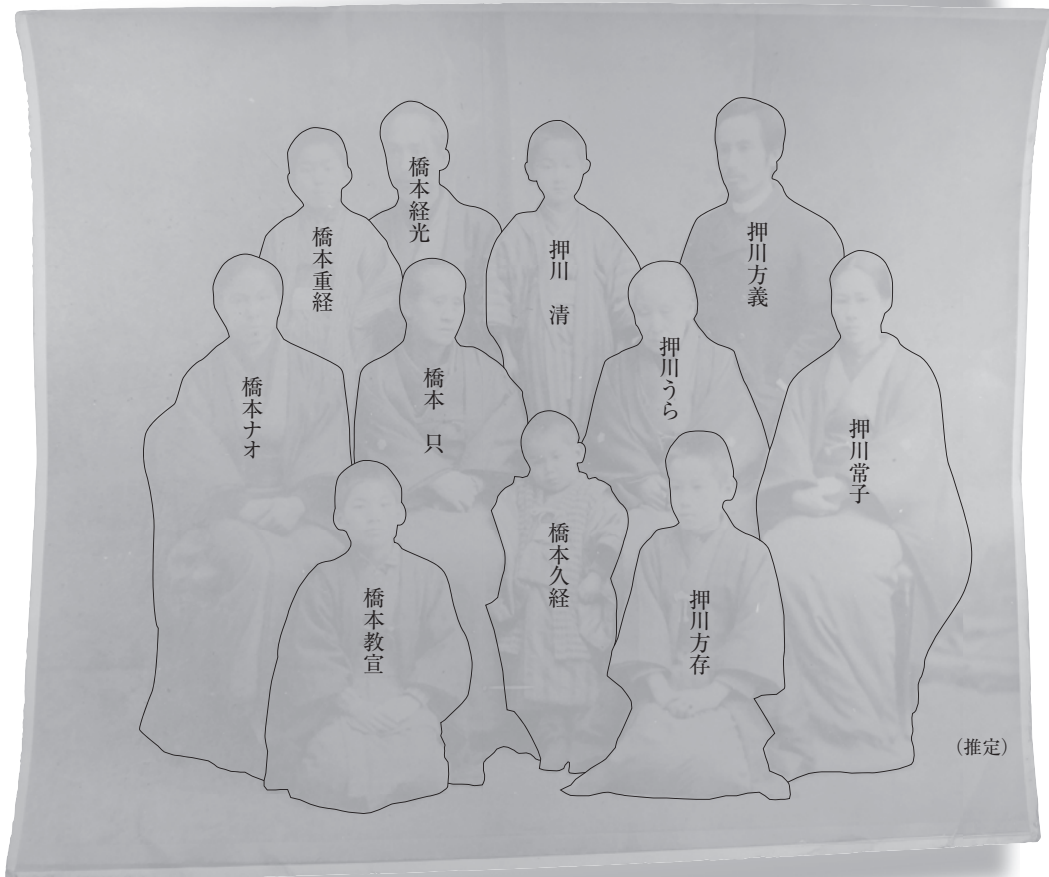
中武 敏彦

## 押川家・橋本家の家族写真 (押川家文書)

押川方義が欧米視察から帰国した1890 (明治23)年5月以降に、両家の記念写真として撮影されたと推定される。向かって右側に押川家、左側に橋本家の家族が並ぶ。「押川家文書」とは、松山藩につかえる土族であった押川家、および方義の生家である橋本家に伝わる近世期の藩政資料を含む膨大な史・資料である。方義の孫の押川昌一氏から1984年以降数回にわたり寄贈された。



学校法人 東北学院



橋本重経

橋本重経

橋本経光

押川清

押川方義

押川うら

橋本只

押川常子

橋本教宣

橋本久経

押川方存

(推定)

# C O N T E N T S

## ごあいさつ

「東北学院資料室」第12号発行にあたって 星宮 望 ……………1

## 寄稿

登録有形文化財 デフォレスト館  
——仙台に現存する最古の宣教師館 志子田 光雄 ……………2

(昭和19年4月開設)

幻の東北学院航空工業専門学校校則について 鶴本 勝夫 ……………12

## 所蔵資料紹介

草創期の「東北学院報告」草稿 中武 敏彦 ……………19

## 2012(平成24)年度行事

「東日本大震災による多賀城市の被災状況の  
調査と復旧・復興に向けた提言」報告書贈呈 ……………23

多賀城市と「災害時における施設使用及び学生  
ボランティア活動の支援協力に関する協定」を締結 ……………23

東北学院大学工学部設置50周年記念事業 ……………24

東北学院幼稚園創立50周年記念礼拝・コンサート開催 ……………25

東北大学片平キャンパス南地区(一部)売買契約を締結 ……………26

時事(2012年4月～2013年3月) ……………27

受贈資料一覧(2012年4月～2013年3月) ……………29

東北学院資料室規程 ……………30

東北学院の沿革 ……………31

# 「東北学院資料室」 第12号発行にあたって



東北学院 学院長 星宮 望

東北学院資料室は2001（平成13）年5月、建学の精神に関連する資料を収集・保存・展示し、東北学院の発展に資することを目的に創設されました。以来、同窓生をはじめ、多くの学生、生徒、そして一般の方々にご見学いただいておりますことに深く感謝申し上げます。特に近年は近隣住民の方々の見学を多く受け、新約聖書の中の「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」との主イエスの御言葉にならい、資料室としましても地域貢献への活動をより一層努めて参りたいと思います。

資料室設置当初から発行しております資料室年報も第12号をお届けすることになりました。今号には、東北学院大学名誉教授の志子田光雄先生と鶴本勝夫先生にご寄稿いただきました。志子田先生には、昨年9月に国の登録有形文化財として指定を受けました大学土樋キャンパス西端に建つ旧宣教師住宅「デフォレスト館」について、鶴本先生には昭和19年4月に開設されました東北学院航空工業専門学校の校則についてご執筆をいただきました。また一年間、資料整理にご尽力をいただきました資料室嘱託職員の中武敏彦氏には、東北学院草創期である明治25年の「東北学院報告」の翻刻と解説をいただきました。ご高覧いただけましたら幸いです。

平成24年度の事業としましては、5カ年に亘り進めて参りました資料室所蔵写真のデータ入力をほぼ終了しました。これは、明治19年の仙台神学校創設以来収集されてきました写真と

「東北学院百年史」編さんの際に収集された写真のデジタルデータ化です。将来的には、「東北学院関係写真データベース」として公開し、広く社会に還元していきたいと考えております。なお、現在、資料室のホームページ「東北学院の100年」に、本院の歴史に関わる記録として約300枚の写真を抽出して公開しております。

また、創立125周年記念事業の一環として進めておりました、図録『押川方義とその時代』（学校法人東北学院発行、河西晃祐監修）をようやく刊行することができました。現在も整理を続けております膨大な分量の「押川家文書」の一部を利用しての今回の刊行は、押川方義研究の第一歩となります。さらなる調査・研究が待たれます。なお、「押川家文書」とは、押川方義の孫の昌一氏から1984年以降数回にわたり本院に寄贈された、押川家および方義の生家である橋本家に伝わる近世期の藩政資料を含む膨大な史・資料群のことです。

平成24年度、「東北学院資料室」から「東北学院資料センター」への改称と、組織改革を推し進めることが決定しました。先人たちの熱い祈りとその献身犠牲により今日の東北学院があることを忘れることなく、今後も調査、研究に取り組んで参ります。皆さまのご協力をお願い申し上げます。

登録有形文化財

## デフォレスト館

— 仙台に現存する最古の宣教師館

東北学院大学名誉教授  
志子田 光雄

この度登録有形文化財に指定された東北学院大学構内の西端にあるコロニアル・スタイルの西洋館は、シップル教授一家がその家に住んでいた最後の宣教師であったことから、長らく「シップル館」と呼ばれてきたが、今後は最初の住人であったデフォレスト宣教師にちなんで「デフォレスト館」と呼ぶことになった。



デフォレスト館

## 1. デフォレスト——誕生から牧師就任まで

デフォレストは、コネチカット州ウエストブルックの会衆派教会 (Congregational Church) の貧しい牧師ウィリアム・アルバート・ハイドの息子で、8人兄弟姉妹の5番目として1844年6月25日に生まれた。名はジョン・キン・ハイド (John Kinne Hyde)、通称ジョンと呼ばれていた。16歳の時、コネチカット州ボズラヴィルの小学校の教師となるが、生徒たちの排斥に会って1年で辞め、翌年の1861年から1年間マサチューセッツ州アンドーヴァーのフィリップス・アカデミーで学んだ。折しも南北戦争が始まり、彼は第28コネチカット義勇軍に身を投じ、1862年から9ヶ月間フロリダからミシシッピ川下流域で戦った。この参戦が彼の内的経験に大いに影響したであろうことは、彼の伝記『一宣教師の伸展。ジョン・ハイド・デフォレストの伝記』(The Evolution of a Missionary. A Biography of John

Hyde DeForest) (以下『伝記』と省略) の著者、彼の娘で後に神戸女学院第5代院長となったシャーロット・B・デフォレストも短く触れている。

これは『伝記』に記録されていない事柄であるが、東北学院の理事の一人であった大石栄一 (大正3年普通科卒) が、土樋の松源寺本堂を借りて開いていたデフォレストの日曜学校の生徒であった時に聞いた話として私に直接語ってくれたところによれば、「ジョンが南北戦争に参戦していたある日のこと、雨に降り込められ、一本の大木の下で銃を抱えて座り込みながら、間もなく戦争は終結するであろう、そのあとどうしようと思いつめがらしていた時、ふと東洋にジャパンという野蛮国があるようだが、そこにキリスト教を伝道しようと考えたのだ」ということである。ペリーが日本に開港を迫って間もない19世紀中頃のアメリカ東部の片田舎の青年が、日本を野蛮な国と考えていたことは想像に難くない。さすがに娘のシャーロットは『伝記』でそうは書いていないが、デフォレストは、一夫一婦主義に触れた折に、芸者との関係が一般的であった日本の風習を「セミバーバリズム」(半野蛮) という言葉を用いて論じていたというので (『伝記』263頁)、当時彼が日本をそのように考えていたことはあながち否定できないであろう。それはともかくとして、この南北戦争参戦の頃に、その後の半生を日本伝道に捧げる志の萌芽があったものと考えられる。

1863年、戦争終結と同時に彼はイエール大学に入るが、学資が続かずすぐ退学し、ニューヨークのアーヴィングトンの寄宿制男子校で1年間教師をした後、1864年にあらためてイエール大学に入学した。本来は父親と同じくアマースト大学で学びたかったようである。イエール大学では奨学生となるが、その奨学金は「デフォレスト基金」をもとにしているもので、現在でも運用されている。イエール大学の資料によれば、デフォレストは商人であった (海賊であったという説もある) が、プエノスアイレス

に去るにあたり、1823年に5000ドルを大学に寄付し、それを28と4分の1年間投資運用して基金を増やした後、毎年1000ドルを「デフォレストの母の男系子孫」がイエール大学で学ぶ時にその学資とするように、というのが彼の願いであった。ただし、デフォレスト家に誰も該当者がいない場合には、経済的に恵まれない才能のある男子で、デフォレストの名前を名乗ることに同意する者が同額を受け取ることができると規定されていた。ジョン・ハイドはその規定に従い、両親の許可を得るとともに法的手続きを行い、以後ジョン・ハイド・デフォレスト(John Hyde DeForest)と名乗るようになったのである。

イエール大学卒業後、イエール神学校に進学し、1871年に終了と同時に聖職者としての按手礼を受け、サラ・C・コンクリンと結婚し、コネチカット州の会衆派マウント・カメル教会の牧師となった。1872年春、妻サラと生まれたばかりの子供を失うが、1874年まで牧会を続けた。1873年から4年にかけてカメル教会でリヴァイヴァル運動が起こり、それを機に海外伝道への決心を新たにし、1874年にサラ・エリザベス・スター(札幌農学校のクラーク博士の妹の教え子)と結婚し、同年アメリカン・ボード(米国海外伝道協会)派遣宣教師として日本に向かったのである。



デフォレスト夫妻

## 2. 宣教師デフォレスト——大阪から仙台へ

最初は大阪に着任し、おもに西日本で宣教活動を行った。1880(明治13)年並びに1885(明治18)年には鳥取を訪れ、1890(明治23)年の鳥取教会創立の契機となり、1882(明治15)年には京都でデフォレストから洗礼を受けた男女6名が教会堂を献堂して島之内教会を設立するなど、1886(明治19)年まで各地で精力的に活動した。

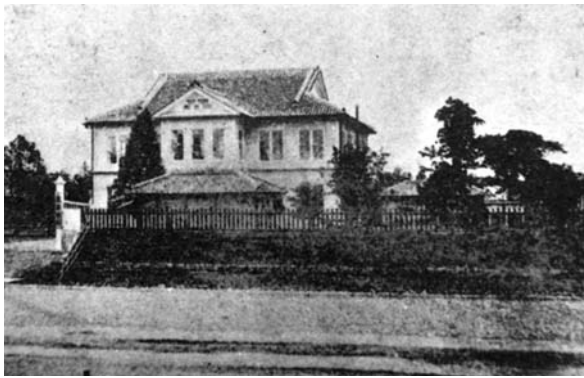
1875(明治8)年に同志社を創立した新島襄が、1884年に2度目の渡米をした際、病床で日本の地図を眺めていたとき、東北地方にキリスト教主義の学

校を建てるには仙台がその中心地となるべきだと考えた。仙台藩出身で、かねてから仙台にアメリカのカレッジのような学校設立の希望を抱いていた前米総領事で当時日本銀行副総裁であった富田鐵之助は新島の構想に賛同し、当時の仙台区長(市長)松倉恂とともに設立主となり、新島を校長とする学校を創立する計画をたてた。その計画のもとにアメリカン・ボードは1886(明治19)年5月に新島とデフォレストを仙台に派遣したが、当時の宮城県令松平正直は2人を歓迎し、政界にも顔のきく新島を評価し、5000円の拠出を約束した。

しかし、学校設立には解決しなければならない一つの問題があった。それは、長い間苦闘の末に仙台に教会を開き、ドイツ改革派教会派遣の宣教師ウィリアム・ホーイの協力を得て仙台神学校を創立し、さらに男子と女子教育の学校設立を目指していた押川方義との交渉であった。デフォレストの6月3日の日記によれば(『伝記』151頁)、2つの計画を統合する案も出されたが、長い折衝の末、押川はついに松平知事や富田鐵之助ら新島側に対し、統合は困難を伴うだけでなく弊害を生ずる恐れもあるので、自らの希望を潔く捨て、念願していた英学校から完全に撤退し、仙台神学校に専念する旨を伝えたのである。ホーイも失望を隠さず、それに従ったとある。

かくして、『同志社百年史』によれば、「1886年の8月末には、諸般の準備が終わり、英学校開校の作業は速やかに進められていた。」アメリカン・ボードは、デフォレストを正式に仙台に派遣することを決め、9月にはデフォレスト夫人と4人の子供を、当時すでに文化、商業、軍事の中心都市となっていた人口5万の仙台に正式に送り込んだ。再び『同志社百年史』の言葉を借りれば、「かくして「宮城英学校」は9月21日、松倉恂の寄附した敷地、仙台区清水小路9番地に誕生した。」「英学校の校舎には副校長市原盛宏名義で、デフォレスト購入の三軒の家屋が当てられた。」(281頁)。この宮城英学校は翌年本校舎と寄宿舎が新築され、大伴家持の「すめらぎの御代栄えむと東なるみちのく山に黄金華咲く」から「東華学校」と改名され、校長新島襄の言葉によれば「第二の同志社」として、111名の生徒を集め、1887(明治20)年6月17日に行われた開校式をもって男子中等教育の学校がスタートしたのである。新築された東華学校は、木造2階建て、下見板張りの外壁に上下窓、屋根は瓦葺きのルネッサンス風洋風建築であった。

一方、デフォレスト一家は最初の冬こそ日本家で寒さをしのいだが、シャーロットが記した『伝記』



東華学校

によれば、「次の冬までにはミッション・ハウス（複数形、あとで触れるようにデフォレスト館とブラッドショー館）が完成していた」（153頁）とあるから、本稿の主題であるデフォレスト館は、東華学校校舎完成の年の前後から着工され、約半年の期間をおいて1887（明治20）年の下半期には完成していたものと推定される。

東華学校もデフォレスト館も誰が実際に施工したかは詳らかでないが、日本人の大工であることはその造作の様々な部分から推測できる。そして、すべてではないにしても同じ大工が、東華学校の建物が完成したのち、デフォレスト館ならびにその東隣に位置していたほとんど同一構造のブラッドショー館の建築に携わったことは容易に想像できる。東華学校とデフォレスト館には、学校と住宅という目的の違いから相違はいくつかある。最大の相違点は屋根であり、東華学校が入母屋造りの瓦葺きであるのに対し、デフォレスト館は寄せ棟造りのスレート葺きである。しかし、双方の建物はともに木造2階建てであり、外壁は下見板張り、上下窓、軒先には洋風線形の軒蛇腹による極隠しなどがあることは共通している。前述の大石元理事がデフォレストから聞いた話として私に語ってくれたところによれば、「デフォレスト館は、デフォレストが自分で設計し、日本人の大工に作らせたものである」とのことであった。

### 3. デフォレスト館——その概要

デフォレスト館が建った当時の立地状況を瞥見すると、敷地は片平丁の南端と南六軒丁の西端が交わる地点、正式には「南六軒丁6番1」で、デフォレストが通った清水小路の東華学校までは、最短距離を通ればほぼ正確に1キロの地点にある。敷地の地勢から述べると、広瀬川の河岸段丘である仙台中町段丘が下町段丘に移る段差のある敷地に位置し、もともとはデフォレスト館の建物の南側の端から約5、6

メートルの芝生があり、そこから約50度の急傾斜でいわゆる段丘を下り、土樋の隣地と同レベルの湿地に続いていた。湿地は、近くの子清水の地名が示すように、清水がこんこんと湧いて流れ、その排水のために約2メートル四方の区画で縦横に溝が切られていた。私が記憶している1940年頃（昭和10年代の中頃）には、南側の隣地との境界にはかなり大きな胡桃の樹が立ち並び、隣地も樹木が繁茂していたので、昼なお暗い状態であったが、新築当時は主な部屋から愛宕山や向山、経ヶ峰を、そして玄関や書斎、2階の北側の部屋からは片平丁の遥か彼方に泉ヶ岳を見晴らせる絶好の立地であった。

デフォレスト館の敷地は、現在の4号館西端と音楽館の間を南北に引いた線までであり、木製の柵で仕切られていた。その東側、すなわち現在の3号館の位置とほぼ同じ場所には、ブラッドショー館があり、その東側の境界は2号館と3号館の間を南北に走り、デフォレスト館の敷地の南北に走る境界線と並行していた。

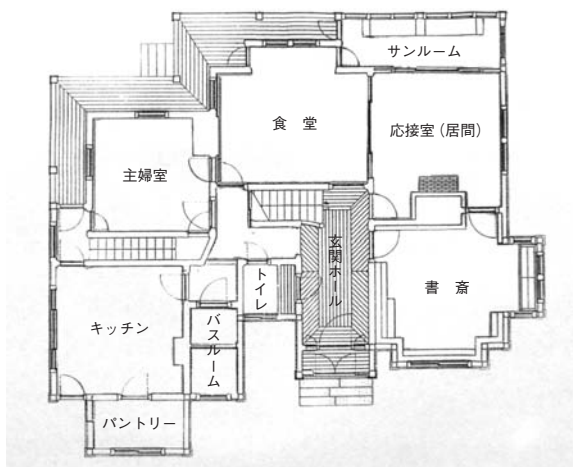
デフォレスト館は、地上約1メートル20センチというかなり高い自然石を組み合わせた土台の上に建っている。即ち床下が当時の日本家屋に比べるならば格段に高いのである。土台の北面と西面、そして東面の半分はレンガ積みにより自然石の土台構造の



建物東面の土台

間を埋めているが、南面と東面の一部は貫（ぬき）を斜め格子状に組み、菱形の隙間を見せる覆いが張り付けられている。北と西からの寒さを防ぎつつ、日本の高い湿度、特に湿地に近いこの土地の湿度を防ぐために南と東からの風の通りを良くするように工夫されたものと考えられる。このように高い土台の上に木造2階建て、下見板張りペンキ塗りの建物が載っている。（戦後、ペンキの剥離が激しかったために現在の色に塗り替えられたが、もともとは青みがかかった灰色で、柱と窓枠は濃く、下見板はそれより薄い色に塗り分けられていたと記憶している

が、構造上そのような印象を抱いたのかもしれない。) 窓は大部分上下窓であるが、一部引違い窓も配置してある。屋根は寄棟、一部方流れで、全て宮城県雄勝産の天然スレートで葺いてある。屋根にレンガで固めた煙突が3箇所出ており、2箇所は暖炉と各部屋の石炭ストーブの煙突からの煙を集めるためであり、片流れ屋根の部分のものは台所用である。1、2階とも南側から東側にかけてベランダが設けられ、天井と壁は漆喰塗りのアメリカン・コロニアル・スタイルの住宅建築である。(後に壁には壁紙が貼られたり、1960年代後半には大部分の部屋が暖房効率を良くするために天井が低く改造されるなど、大幅に改装されている。)



1階平面図

玄関は、3段の自然石の階段を登ったところから立ち上がる2本の洋風の角柱が楕円形アーチのペディメントを載せ、トタン張りの屋根の中央には、棟飾りとしてトタンあるいは銅板の鬼板（ペンキが塗られているため材質は未確認）が載せられている。この



玄関

の装飾は日本人大工の仕事であることを示唆する。入り口には二重のドアを設け、外側は腰板部分を除いて総ガラス張りの風防にし、90センチほど中に入って内側に開く玄関のドアがある。そのドアに向かって左側に郵便受けがあるのは、外側の風防のドアは常に解錠されていたことを示す。この北に面する入り口に風防を設けたことは、シャーロットが『伝記』の中で触れているように、デフォレスト一家が寒い仙台で最初の冬を過ごした日本家屋での経験から来たもの

であろう。



玄関ホール

凝った装飾的な板張りとなっている。

各部屋を反時計回りに紹介していけば、玄関ホールの右手、すなわち北西角の部屋は書斎である。3



書斎

方の壁に作り付けの書架を設け、次の写真からわかるように、デフォレストは机を北西角において仕事をしていたようである。書架があるため北側の引き違い窓は高い位置にあり、外から見ると建物の正面に位置するためか、窓枠は木製の菱形を基調とする



書斎でのデフォレスト

飾り窓になっている。菱形はこの建物の基調装飾であると私は解釈しているが、玄関のドアのガラス窓枠をはじめ、土台の格子、ベランダの天井などにも見られる。西に張り出した上下窓の下部には作り付けのベンチが設けてあり、座席部分の板を上げると内部は物入れになっている。現在のフローリングは



四角い渦巻き型にデザインされているが、これは後年の施工である。それは、玄関と書斎の間の框（かまち）のところでそれぞれの床板の高さが異なっていることから分かる。もともとは玄関の板材と同一のものが全室に張られていたが、後に50ミリ幅のフローリングがその上に張られたのである。（この種のフローリングは他の部屋にも張られており、同じ時期に施工されたと考えられる。）もともとは、「書斎でのデフォレスト」の写真で分かるように、玄関と同じ床板の上に部分的に絨毯を敷いていたようである。書棚には現在ペンキが塗られているが、建築当初書架は濃いウォールナット色調のニス仕上げで、全体に思索に適した落ち着いた雰囲気を出していたと推測される。（ペンキ塗装は進駐軍接収の時に行われたようである。）

西南角の部屋は居間兼応接室と考えられ、玄関から直接、また書斎からも入れる。書斎との間の壁には作り付けの暖炉がある。南側には全面引き違いガ



居間兼応接室

ラス戸によって仕切られた1.8メートル幅の広いサンルームが付属しており、年代は不明であるが、あとからベランダを改造して増築されたものである。その証拠は、サンルームの外側、即ちベランダ側から見れば、ベランダの小間返しの天井とそれを取り囲む廻り縁は、サンルームのところで不自然に切ら



サンルーム

れているからである。サンルーム内部の窓際には作り付けの箱型ベンチが設けてあり、その下は物入れになっている。（筆者が学生の頃、シップル教授はこの部屋でパイプクラスを開き、学生はこのベンチに腰を掛けさせられた。後に筆者は長い間研究室としてこの

部屋とサンルームを使用した。サンルームの西側には外に通じるドアがあるが、これはこの部屋が大学院事務室に使用された時、外に建てられた書庫に通じる廊下への出入り口として後から設置されたもので、本来は南面全体にある上下窓と同じ形状の窓があった。）

玄関に入って突き当たりの部屋、すなわちこの家の1階の中央の部屋は、上記暖炉のある居間兼応接室と4枚の引き違い板戸で仕切られており、これを取り外せば広い部屋として使用できる。2つの上下窓を設置した南面は、張り出しの形となっており、その張りだし部分から西側にはサンルームに、東側にはベランダに通じるドアがある。この部屋は普段は食堂として使われていたようであり、北の壁面にはハッチ、すなわちL字型の、一般には調理場（この家の場合にはキッチンに通ずる廊下）と食堂の間のサービス口がある。コックが直接料理を食卓に運ばなくてもよい仕組みになっている。



食堂のハッチ（通常は扉で閉じている）

これらの部屋に比べるとやや小ぶりの東南角の部屋はきわめて快適な部屋であり、新築当時は部屋の南西角に暖炉が設置されていたと考えられる。玄関から廊下を通して直接行ける部屋で、食堂、応接室へも、また台所へも通ずる部屋であるので、デフォレスト夫人の部屋として設計されたものと考えられる。そうであるとするならば、デフォレストの妻に



主婦室（小児室）

対する愛情の深さが推し量られる。ただしここに面白い痕跡が残されている。北の壁面に、その背後にある階段の下の部分を利用して作り付けの引き出しが6個とその上部に戸棚がある。その引き出しの一つの内側に写真のような文字が残されているのであ



引き出し内部

る。「小児室下から式東」と読める。引き出しの位置を大工が記したものと判断され、他の引出しにも同様の書き込みがある。子供が母親の手を離れるまでは当然手元に置いたため、この部屋を小児室とよんだのであろう。引き出しの引き手金具は完全に日本風であり、この文字とともにこの建物が日本人の手になる何よりの証拠であると言えよう。

北東角の部屋はキッチンであり、西側壁面には石炭使用のレンジ（オープン付きこんろ）が置かれ、その煙突が上述の通り屋根から出ている。この部屋にも南側壁面に、隣接する階段の下を利用して引き出しがある。キッチンの北側にはパントリー（食料



キッチン（左側ドアの奥がパントリー、右側は外に通じる）

貯蔵室）がある。キッチンの北東角には外に通じるドアがあり、デフォレスト館の北東部、南六軒丁に面して建てられた日本家屋に廊下でつながっていた。この日本家屋は木造下見板張りの2階建てで、1階に2室と台所、風呂場、トイレ、2階には2室ある純和風家屋であり、いわゆるヘルパー（家政婦）の家であった。この建物の建築時期は不明であるが、1919（大正8）年以前からあったことは分かっている。1956（昭和31）年にデフォレスト館の玄関に

向かって右側のスペースに移築され、筆者は数年間住んでいたが、老朽化のため1966（昭和41）年に取り壊された。

台所と背中合わせの西側の小部屋は、バスルームと考えられる。通常アメリカの標準的な家では、バスルームの中に浴槽と便器が併置されるが、そのような習慣のない日本人客を想定してのことであろう



階段筆筈

か、少なくとも1階部分には、このバスルームの他に、便器のみのトイレットが、玄関のクローゼットとこのバスルームとの間の小部屋に設置されていた。

このトイレットと廊下を挟んだ反対側の2階へ登る階段の下に、いわゆる階段筆筈風の引き出しがあるのは、夫人の部屋と台所の引

き出しとともに、いかにも日本人大工の工夫である。



書斎の窓の額縁

日本人大工の跡は額縁（窓枠）にも見られる。筆者は米国フィラデルフィアのカーペンターズ・ホールを訪れた時、展示されていた多種多様な面取り鉋に驚かされ、西洋館の窓枠の面取りの複雑さを納得したことがある。デフォレスト館の窓枠も写真で見ると複雑であるが、

ある建築の専門家によれば、この程度であるなら和鉋で削ることができ、和鉋で削った角度がはっきり出ているということを知り、改めて日本人の大工の造作であることを確信した。

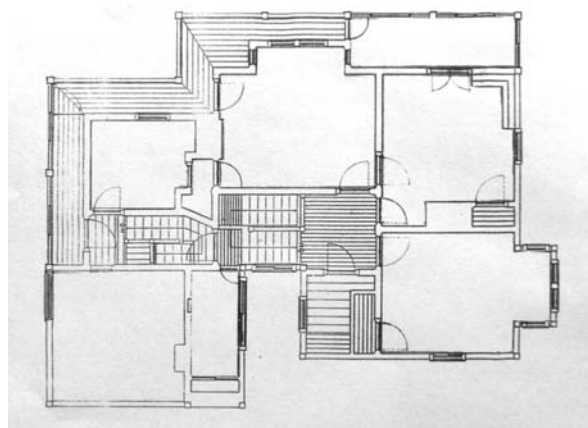
2階へは、玄関ホールから登る階段と、主婦室と



機能的な階段

キッチンをつなぐ東端の廊下から登る階段がある。もし真横から透視することが可能であるなら、X字型の階段であり、それぞれの階段が合流する中間のランディング（踊り場）を介して再び分かれて2階の各部屋に上がることが可能であるというきわめて巧みな設計になっている。

玄関から登る階段は、踊り場で180度方向を変え、2階の広いホールに至る。それに隣接し、玄関部分の上部に当たる空間には物置風の小部屋がある。



2階平面図

2階の北西角には、基本的に1階の書斎と同規模の部屋があり、南西角には階下と同様に後からの造作であるサンルーム付きの部屋、その隣には階下の食堂に相当する部屋がある。いずれも独立しており、寝室や子供部屋として用いられたものであろう。

東端の廊下から登る階段も踊り場で180度方向を変えて東南角の2階部屋に至る。現在、この部屋の床は、他の部屋にあとから張られたフローリングではなく、幅広い床板が張られており、新築当時の床の様子を示している。

1階の浴室の上にあたる部分には、2階用のバスルームがある。すなわちバスタブと便器が併置されているタイプの部屋であった。（現在は、和風に改装されている。）

1階のキッチンの上階はなく、片流れの屋根となっており、屋根裏の空間は物置になっている。

この建物に特徴的なものはなんといっても1、2階ともに南面と東面の一部を取り囲むベランダの在存である。ただし、2階の南面の3分の1は上述の通り後からサンルームに改造されており、2階の東面もそれより後に（記憶によればシップル教授が住んでいた時に）ガラス窓が入れられ、その下に下見板が張られて閉じた空間になった。内部にはベランダの手すりがそのまま残っているので、後からの造作であることは明白である。（隣接していたブラッドショー館は改造されず、南側と東側全面にベランダ



ベランダが際立つデフォレスト館南面

が回らされていたと記憶する。）

ベランダの天井は菱組天井で、貫を小間返しに張り、それと斜めに同じように貫を張って菱形の隙間ができるように組まれている。ここにも基本的な装飾文様の菱形が出てくるが、当時の洋風建築にはよく用いられたデザインの様であり、東華学校のポ



ーチの天井にも用いられていたという記録がある。

ここであらためて登記簿を調べると、最初の所有主は、登記年月日不詳で、山城国上京区の市原盛宏となっている。市原は、前述のとおり、宮城英学校（後の東華学校）の副校長であ

特徴的な菱形文様天井のあるベランダ

あった。しかし実際に建築費を出したのは、上記宮城英学校の最初の校舎である3軒の日本家屋購入の場合と同じくデフォレストであり、事実上はアメリカン・ボードの資金提供によるものであろう。明治27年1月11日には同志社が買い取り、さらに明治45年1月23日には同志社系の在日本コングリーゲーション宣教師社団に所有権が移転している。

#### 4. デフォレストの活躍

##### ——東華学校と東北伝道

デフォレストは、東華学校の理事として、また英語教師として、自宅から、遙か彼方前方に泉ヶ岳を眺めながら片平丁を北上し、100メートルほどで右折し、七軒丁経由で真直ぐ五ッ橋通を通り、連坊小路と東七番丁角まで1キロの道を通勤した。あるいは、いまだ武家屋敷の面影を残していた南六軒丁を東に進み、突き当りを左折し、田町、上染師町とい

ういささか猥雑な旧街道を通ることも出来た。

東華学校は、その本館の正面の破風壁に書かれた「SEEK TRUTH AND DO GOOD」のモットーの下に優れた教育を行い、河北新報の創設者一力健次郎や小説家の真山青果、陸軍大将から学習院長となった山梨勝之進（現天皇が皇太子の時にヴァイニング夫人をその家庭教師に招いた人物）、東華学校廃校後途中から東北学院に転校し、広島高等師範教授、京都第三高等学校教頭などを歴任した栗原基など優れた人材を排出した。しかし、僅か5年半後の1892（明治25）年3月に廃校となった。その理由は、徐々に起こりつつあった排外感情、反キリスト教という国粹主義の波に翻弄されたためといわれているが、1890（明治23）年に亡くなった新島襄の影響力の喪失、さらに徴兵に関して特典が与えられていた同程度の官立学校が設置されたことなどがある。その前年の1891（明治24）年には、押川方義の仙台神学校が伝道献身者以外の学生も増加したため、校名を東北学院と改めて普通教育を行う計画を立てていたことも影響したのかもしれない。

東華学校の跡地、現在のJT（日本たばこ産業株式会社）仙台支店の敷地、連坊小路と東七番丁角には、1932（昭和7）年に建立された徳富蘇峰撰、高



東華学校遺址碑

橋天華書の稲井石の東華学校遺址碑が立っている。（ついでに述べておけば、この東華学校は1892（明治25）年に県立尋常中学校（後の県立第一中学校）に移譲され、1899（明治32）年に県立第一中学校が南六軒丁（現在の東北学院大学キャンパスの向かい側の東

北大学キャンパス）に新築移転した後、その跡に1904（明治37）年に私立東華学校が設立され、同校が1908（明治41）年に東九番丁移転と同時に本館も移築されてしばらく使用されていたが、1973（昭和48）年に解体された。なお同校は1921（大正10）年に宮城県第二高等女学校に統合され、1948（昭和23）年宮城県立第二女子高等学校と名称変更、更に2010（平成22）年宮城県仙台二華中学校・高等学校と校名を変更している。）

デフォレストは、東華学校廃校前年の1891（明治24）年に他の宣教師とともに辞職しているが、こ

の東華学校経営の5年間を振り返り、「仙台におけるこの5年間は、私の記憶する限り、最も困難な時期であったが、間違いなく最も祝福された時期であった。」と述べている（『伝記』183頁）。これまでの宣教・教育活動に対して、イエール大学は1889（明治22）年にデフォレストに神学博士号を授与している。

東華学校閉校後もデフォレストは仙台に留まった。1887（明治20）年に東華学校の教員を主な会員として設立された「日本組合教会宮城教会」（後の「東三番丁教会」、現「仙台北教会」）の最初の仮牧師でもあった。後にはこの教会と職務的にはかわからず（『伝記』190頁）、広く求めに応じて説教者、講演会の講師として、あるいはトラクト（宣教用の小冊子）執筆を通して、仙台地域はもとより、新潟、会津、酒田、水沢、さらに日本全国にわたって、自由に宣教活動を行った。彼の活動は教会を新たに切り開くというよりは、地方のキリスト教の教勢を援助することにあった。

そして常に仙台に戻り、デフォレスト館の書斎から日本や米国の新聞に向けて様々なテーマで記事を送り続けた。米国の新聞の主なものは *Missionary Herald* や *Religious Herald, Independent* などであり、日本の政治、経済、宗教学情などを定期的を送稿していた。仙台組合教会の片桐牧師が常に助力者として貢献していたが、組合教会の後身である東三番丁教会では、1914（大正3）年にデフォレストのこれらの働きを称えて「デフォレスト記念礼拝堂」を建設した。しかし、その教会堂は、1945（昭和20）年の仙台空襲によって焼失した。

デフォレストは、1896（明治29）年6月15日の明治三陸地震の際には積極的に救済活動を行い、1905（明治38）年から翌年にかけての東北地方の飢饉のときには、仙台在住外国人による飢饉救済委員会を立ち上げ、その主要メンバーとして活躍した。

1904-05（明治37-38）年の日露戦争の時には、6週間にわたり満州を訪れている。大陸に渡るに先立ち、桂太郎首相や陸軍大臣寺内正毅と会い、前線の司令官に対する紹介状を得ることが出来た。戦地では、仙台で親しくしていた第二師団長で、当時遼東守備軍司令官西寛二郎大将と会い、当地の劇場で日本軍兵士らに対して「アメリカ魂」や「戦争と宗教」などの講演を行った。西司令官からは最前線での取材、撮影の許可を得、アメリカの *Missionary Review of the World* に戦場の様子を寄稿している。日露戦争後に起こったアメリカにおける反日世論に対して、デフォレストは信頼すべき情報の不足がそのよ



勲章を胸に

うな事態を招来しているとして、様々な形で日本の弁護に活躍したのである。これらの日本に対する多大な貢献により、1908（明治41）年にデフォレストは勲四等旭日小綬賞を授与された。



仙臺教会

1910（明治43）年に、最後の仕事として朝鮮の組合教会の支援に出かけたが、その11月、仙台に帰って間もなく、絶え間ない演説やインタビュー、それに執筆活動のために、過労から心臓発作に見まわれた。長い間の動脈硬化が進行した結果である。1911（明治44）年4月に、ついに長年住みなれた仙台の自宅を離れ、東京の聖路加病院に入院したが、病状は急速に進み、5月8日に67年の生涯を閉じた。来日してから37年、仙台に住んでから25年であった。彼自身の長年の望みにより遺体は火葬に付された。葬儀は、5月11日に、組合教会は狭かったので広い長老派の教会（『伝記』に教会名は書かれていないが、明らかに東二番丁と南町通角にあった押川方義が創設した仙臺教会）で、デフォレストの指名により、彼よりも13歳後輩ながら長年の友人であり、学校経営にいろいろアドバイスを与えてきた東北学院長シュネーダー博士の説教「勝利を下さる神に感謝」をもって行われ、嘆きではなく勇気と勝利の葬儀にしたいという彼の希望はかなえられた。その日の日没頃、遺骨は北山墓地に眠る日本人キリスト者達のそばに葬られた。写真にみる如く、角柱の墓石は四角の墓地に対して菱形に置かれ、その一面は彼が日頃跋涉を楽しんでいた山々の方を向き、他方は二つの半球の国家間に生じた大きな亀裂に橋をかけたいという彼の想いが常に羽ばたいていた広大な太平洋の方角を向いている（『伝記』293頁）。（なお、妻のエリザベスと娘のシャーロットもここに眠っている。）

うな事態を招来して

いて、最後の仕事として朝鮮の組合教会の

支援に出かけたが、その11月、仙台に帰って間もなく、絶え間ない演説やインタビュー、それに執筆活動のために、過労から心臓発作に見まわれた。長い間の動脈硬化が進行した結果である。1911（明治44）年4月に、ついに長年住みなれた仙台の自宅を離れ、東京の聖路加病院に入院したが、病状は急速に進み、5月8日に67年の生涯を閉じた。来日してから37年、仙台に住んでから25年であった。彼自身の長年の望

みにより遺体は火葬に付された。葬儀は、5月11日に、組合教会は狭かったので広い長老派の教会（『伝記』に教会名は書かれていないが、明らかに東二番丁と南町通角にあった押川方義が創設した仙臺教会）で、デフォレストの指名により、彼よりも13歳後輩ながら長



北山墓地に立つ墓石

## 5. デフォレスト館——その後

デフォレスト館にはその後コングレゲーショナル系の他の宣教師が住んでいたものと考えられるが、その詳細をここに記す記録は手元がない。

登記簿によれば、1917（大正6）年12月21日に、東北学院を支えていた仙台市東二番丁の在日本リホームド（登記簿ママ）宣教師社団が買い取り、東北学院や宮城学院の宣教師の住居となった。誰が居住したかは、幾多の出入りがあったので現在のところ不明である。

さらに登記簿によれば、1940（昭和15）年2月20日付けでデフォレスト館の土地は財団法人東北学院の所有になっている。日米関係悪化により、ボードの決断によるものと思われる。戦前のデフォレスト館最後の住人はポール・ゲルハード一家であるが、休暇で帰米中に日米は戦争に突入した。

その後デフォレスト館はしばらくの間無住となっていたが、東北学院は建物の軍隊による接收を免れるため、東北学院航空工業専門学校設立に貢献し、東京と仙台の長町に軍需工場（飛行機工場）萱場製作所を持っていた同窓生萱場資郎（大正5年中卒）の表札を掛けていた。萱場が来仙のおりには、萱場製作所役員の伊達興宗（当時の伊達家当主）をよく招き、食事をともにしたという証言がある。後に1944（昭和19）年4月に東北学院航空工業専門学校が正式に開校したときからは、東北帝国大学工学部長から専門学校校長に迎えた宮城音五郎の表札に掛け代えられた。（因みに、デフォレスト館の東隣りのブラッドショー館は、終戦の前年に海軍地方部が入るために徴用された。そこには、宣教師達が帰米する際に私有物を集めて保管していたが、海軍はそれらの品物を玄関前に放り出して山と積み、後に穴を掘って火をかけた。主として書籍や書類、小物類であったが、マンドリンや子供の絵本もその中に含まれていたことを鮮明に覚えている。学校のほとん

どの教職員は多賀城工廠や仙台駅東口の片倉製糸工場、秋保長袋の農家などに学徒動員の付き添いで出かけており、それらの宣教師達の私財を保全する余裕は全くなかったのである。なお、ブラッドショー館は戦後徴用を解除された後、戦災で家を失った複数の教職員家族が住み、他の部屋は学生たちの部室になったが、現在の3号館建設のため、1967（昭和42）年に解体された。）

終戦と同時にデフォレスト館は進駐軍に接収され、将校家族が住んでいた。やがて1947（昭和22）年に、東北学院、宮城学院の宣教師たちが仙台に戻るにつれて、デフォレスト館はかなり早い時期に返還されたが、『東北学院百年史』が記しているように、「一時、アンケニー夫妻、二人の子供を持つシップル夫妻、ほかに三人の独身宣教師が同居していた」（942頁）こともある。その後、進駐軍に接収されていた宣教師館が次々に返還されるにともない、光禪寺通や米ヶ袋上丁、猿曳丁などにあった宣教師館やその他の家屋に宣教師たちは分散し、デフォレスト館には1949（昭和24）年頃からシップル教授一家が入居し、1955（昭和30）年に片平丁の宣教師館に移るまで住んでいたもので、前述のとおりそれ以後長い間「シップル館」と呼ばれてきたのである。

シップル教授一家の移転とともに、デフォレスト館と大学の敷地の間の木製の柵は取り払われ、徐々に現在のキャンパスの形態に変わっていった。そしてデフォレスト館は主として教授たちの研究室として用いられ、後に大学院事務室、最後には東北学院教職員組合集会所になった。

## 6. デフォレスト館——継承と責任

デフォレスト館は、上述の通り1887（明治20）年に建造された。東京白銀台の明治学院にある宣教師館インブリー館は1889（明治22年）の建築であり、「おそらく国内でも2番目に古いもの」と紹介されているが、このデフォレスト館はその2年前に建てられているので、もしかすると国内最古の洋館の一つに数えられるであろう。

現在デフォレスト館は、修理をしないままにかなり老朽化している。特に建物の外部はひどいが、内部はまだ健在である。仙台には宣教師館をはじめ多くのいわゆる西洋館があったが、その大部分は、歴史的価値も顧みられず、20世紀の後半に次々に解体されていった。米ヶ袋上丁にあった2つの宣教師館は東北学院の手でそれぞれ高山海岸と青根温泉に移築され、しばらくは学外研修施設として使用されていた。しかし利用度が低くなるにつれて放置され、

高山の建物は解体され、青根温泉の自然科学研究所は川崎町に移譲され、青根洋館（古賀政男記念館）として周りの環境と馴染んでいとはいえない形で残っている。

最後に残った明治初期洋風建築として貴重なデフォレスト館は、早急に手を加えなければ、急速に復旧不可能となるであろう。南六軒丁の美しい街景観の一部となっている1926（大正15）年に完成した秋保石張りの東北学院大学の本館や礼拝堂を中心に、1930（昭和5）年建造のスクラッチタイル張りの仙台高等工業学校（SKK）の校舎とともに、1887（明治20）年というこれらよりもはるかに古いデフォレスト館が失われることがないように努力しなければならない。

明治中期に仙台における中等教育の発端となり、次々と創立されたキリスト教系諸学校の草分け的存在であった東華学校を事実上経営し、仙台に長い間定住した最初の宣教師であるデフォレストが、南六軒丁のこの場所に建てた仙台最古のこの宣教師館から日本をアメリカに紹介し、日露戦争時には献身的に日本を弁護し、東北学院や宮城学院などの宣教師たちの良き相談相手となるなど様々な行動を起こしてきたことを考えると、同時期に建てられた東華学校をはじめ明治の記念碑的洋館建築がほとんどなくなってしまった現在、登録有形文化財として管理を託された東北学院が、周りの自然環境も含めて、出来る限り建築当時の姿を留め、この歴史的遺産を後世に伝えることは、緊要な課題であり、負わされた責任であると言えるであろう。

### 【主な参考文献】

- (1) DeForest, Charlotte B., *The Evolution of a Missionary: A Biography of John Hyde DeForest for Thirty-Seven Years Missionary of the American Board, in Japan*. New York, Fleming H. Revell Company, 1914.
- (2) 小倉強、『明治の洋風建築—宮城県—』、宝文堂、1976。
- (3) 東北学院創立七十年史編纂委員会、『東北学院七十年史』、東北学院同窓会、1959。
- (4) 同志社社史資料編集所編、『同志社百年史—通史編—』、同志社、1979。
- (5) 東北学院、『東北学院百年史』、東北学院、1989。
- (6) 富永卓、『シップル館に関する一考察』（東北大学卒業論文）1989。（上記デフォレスト館の1、2階平面図は、富永論文掲載図面を元に筆者が作成したものである。）

志子田 光雄プロフィール SHIKODA, Mitsuo

1934（昭和9）年、仙台市生まれ。  
東北学院大学文経学部英文学科卒業。  
東北大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学。  
東北学院大学名誉教授。

# (昭和19年4月開設)

## 幻の東北学院航空工業専門学校校則について

東北学院大学名誉教授  
鶴本 勝夫



東北学院航空工業専門学校



出村悌三郎

東北学院が戦時中、東北軍管区より『現今、不要不急の学校』と名指しされ、廃校を余儀なくされたことは既に二、三の記録や文献で明らかにされている。ときの院長出村悌三郎は、東北学院同窓会東京支部長でもあり、軍需工場の社主でもあった



萱場資郎

萱場資郎に相談した結果、「航空工業専門学校」として、東北学院の命脈をつなぐことに一縷の望みを託したのだった。萱場資郎の人脈と支援により、これが見事に実を結び、結果として今日の東北学院を導き、総合学園に発展した。これら「恩人」の働きを忘れることはできない。

本誌では航空工業専門学校の2つの学科、「航空機科」と「発動機科」の学科課程表を含む校則を掘り起こし、これを解説したので以下に紹介する。尚、この学則は昭和19年2月29日付で文部省に提出した「専門学校設置認可申請」（国立公文書館所蔵）の学則に、3つの条文（以下に記す第十八条、第十九条、第二十条）を新たに加え、実際に施行したものである。

### 東北学院航空工業専門学校校則

#### 第一章 総則

- 第一条 本校ハ専門学校令ノ定ムルトコロニヨリ航空工業ニ従事スヘキ者ニ高等ノ學術技芸ヲ授ケ国家有用ノ人物ヲ練成スルヲ目的トス
- 第二条 本校ニ左ノ学科ヲ置ク  
航空機科  
発動機科
- 第三条 本校ノ修業年限ハ三年トス
- 第四条 毎年本校ニ入学セシムル生徒ノ定員左ノ如シ  
航空機科 百名  
発動機科 五十名
- 第五条 本校ニ本科生ノ外研究生、選科生及委託生ヲ置クコトアルヘシ、研究生、選科生及委託生ニ関シテハ別ニ規定アル場合ヲ除ク外総テ本科生ニ関スル規定ヲ準用ス

第二章 学科課程

第六條 学科目及毎週授業時数左ノ如シ

但シ必要ニ応シ定時間外又ハ休業時間ニ於テ臨時講演ヲ聴カシメ又ハ実験実習ヲ課スルコトアルヘシ

航空機科

計	校外実習	特別講義	工場管理法	法制及経済	航空機整備法	工学実験	設計及製図	工作実験	化学実験	物理学実験	航空兵器	航空計器	推進器	電気工学	機体材料	航空原動機概論	機体工作法	機体設計法	機体構造及強度	航空力学	流体力学	機素設計法	材料力学	機構学	工作法	力学	化学	物理学	数学	外国語	国史	体操及教練	修身
四四						四	四	二	四					二	二						二	一	二	二	一		二	三	四	四	一	三	一
四四					四	四	八	六					二	一					三	二						一		四	四	一	三	一	
四四	四	二	二	四	四	八	四				二				二	二	三												三	三	一		

発動機科

計	校外実習	特別講義	工場管理法	法制及経済	原動機整備法	工作機械	精密測定法	工学実験	設計及製図	工作実験	化学実験	物理学実験	航空計器	推進器	電気工学	原動機材料	航空機概論	原動機工作法	原動機設計法	航空原動機	航空燃料	流体力学	熱力学	機素設計法	材料力学	機構学	工作法	力学	化学	物理学	数学	外国語	国史	体操及教練	修身
四六								四	四	二	四				二	二						二	二	一	二	二	一	二	三	四	四	一	三	一	
四四						三	四	八	六				二	一						四	二						一		四	四	一	三	一		
四四	四	二	二	三	三	四	八	四									二	二	三										三	三	一				



### 第三章 学年、学期及休業ノ日

- 第七条 学年ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル
- 第八条 学年ヲ分チテ三学期トス其ノ期間左ノ如シ  
第一学期 四月一日ヨリ八月三十一日ニ至ル  
第二学期 九月一日ヨリ十二月三十一日ニ至ル  
第三学期 一月一日ヨリ三月三十一日ニ至ル
- 第九条 休業日ハ左ノ如シ  
一、祝日大祭日  
二、日曜日  
三、本学院記念日（五月十五日）  
四、春季休業 四月一日ヨリ四月七日ニ至ル  
五、夏季休業 七月十一日ヨリ九月十日ニ至ル  
六、冬季休業 十二月二十五日ヨリ翌年一月七日ニ至ル

### 第四章 入学、在学、退学及懲戒

- 第十条 入学ノ時期ハ学年ノ初メトス
- 第十一条 品行方正志操堅固ナル男子ニシテ左ノ各号ノ一ニ該当シ且身体検査及人物考查ニ合格シタル者ヲ第一学年ニ入学ヲ許可ス  
一、中等学校ヲ卒業シタル者  
二、専門学校入学者検定規定ニヨリ試験検定ニ合格シタル者  
三、専門学校入学者検定規定第十一条ニヨリ一般専門学校入学ノ指定ヲ受ケタル者
- 第十二条 前条第一号及第二号ニ該当スル学校ノ在学者ニシテ当該学校長ヨリ該学年三月末日マデニ卒業スヘキ見込アリト認定セラレタル者ハ最近二年間ノ成績証明書ヲ添ヘ入学出願スルコトヲ得前項入学志願者ハ其ノ学校ヲ卒業シタル時卒業成績証明書ヲ差出スヘシ 但シ卒業シ能ハサル者ハ入学ヲ許サス
- 第十三条 入学志願者ノ数募集人員ヲ超過スル時又ハ必要ト認メタル時ハ入学検定ヲ行フ入学検定ハ試験検定及無試験検定ノ二種トス
- 第十四条 無試験検定ハ學術操行共ニ優秀ナル者トシテ当該学校長ノ推薦ニ係ル出願者ニツキ之ヲ行フ
- 第十五条 無試験検定ニヨリテ入学セシムヘキ者ノ数ハ募集人員ノ四分ノ一以内トス
- 第十六条 無試験検定ニ合格セサル者ハ別ニ出願ヲ要セスシテ試験検定ヲ受クルコトヲ得
- 第十七条 入学志願者ハ左ノ書類ニ入学検定料十円及写真（入学志願前六箇月以内ニ撮影シタル脱帽半身手札形）ヲ添ヘ学校長ニ差出スヘシ  
一、入学願書  
二、履歴書  
三、第十一条第一号及第三号ニ該当スル者ハ当該学校長ノ卒業証明書、同上第二号ニ該当スル者ハ合格証明書
- 第十八条 入学ノ許可ヲ得タル者ハ仙台市内ニ居住シ独立ノ生計ヲ営ム成年以上ノ男戸主ニシテ生徒ノ監督ヲナシ得ベキ保証人ヲ立テ乙号書式ノ在学証書ヲ提出スベシ。乙号書式用紙（学校ニテ支給）
- 第十九条 保証人改姓改名転籍転居若クハ改印シタル時ハ其ノ旨直ニ届出ツヘシ
- 第二十条 保証人シタルカ若クハ第十八条規定ノ資格ヲ喪失シタル場合ハ更ニ相当ノ保証人ヲ定メ同条規定ノ証書ヲ提出スヘシ
- 第二十一条 生徒ハ本校所定ノ制服制帽ヲ着用スヘシ
- 第二十二条 疾病其ノ他已ムヲ得サル事由ニヨリ欠席セントスル時ハ其ノ

- 事由ヲ詳記シテ速ニ届出ツヘシ病氣ノタメ欠席七日以上ニ亘ル時ハ医師ノ診断書ヲ添付スルコトヲ要ス
- 第二十三条 疾病又ハ事故ニヨリ連続三箇以上修学シ能ハスト思料スル時ハ其ノ旨ヲ詳記シタル保証人連署ノ願書ヲ差出シ学校長ノ許可ヲ得テ一年間休学スルコトヲ得但シ疾病ノ場合ハ医師ノ診断書ヲ添付スルコトヲ要ス 前項ニヨリ休学ヲ許可セラレタル者ハ次年ニ於テ更ニ原級ノ課程ヲ修ムヘシ
- 第二十四条 改姓改名転籍転居若ハ改印シタル時ハ其ノ旨直ニ届出ツヘシ 但シ改姓改名及転籍ノ場合ニハ戸籍抄本ノ添付ヲ要ス
- 第二十五条 退学セントスル時ハ其ノ事由ヲ詳記シタル保証人連署ノ願書ヲ差出スヘシ
- 第二十六条 左ノ各号ノ一ニ該当スル者ハ学籍ヲ除ク  
一、性行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者  
二、学業劣等若ハ身体虚弱等ニヨリ成業見込ナシト認メタル者  
三、正当ノ事由ナクシテ引続キ三十日以上欠席シタル者  
四、正当ノ事由ナクシテ屢々欠席不規律ナル者  
五、授業料ノ納付ヲ怠リ督促ヲ受クルモノオ之ヲ納付セサル者
- 第二十七条 校規命令又ハ訓育ノ趣旨ニ違背セリト認メタル時ハ之ヲ懲戒ス 懲戒ヲ分テ譴責停学及放校ノ三トス
- 第二十八条 生徒ハ学校長ノ許可ヲ受クルニアラサレハ他ノ学校ニ入学シ又ハ他学校若ハ官署ニ於ケル各種試験ニ応スルコトヲ得ス

## 第五章 修業及卒業

- 第二十九条 各学年ノ課程終了ハ該学年中平素ノ勤情及学業ノ成績ヲ考查シテ之ヲ定ム
- 第三十条 前条ノ考查ニ合格セサル者ハ次学年ノ始ヨリ原級ノ課程ヲ再修セシムルモノトス
- 第三十一条 第三学年ノ課程ヲ修了シ成績考查ニ合格シタル者ニハ卒業証書ヲ授与ス
- 第三十二条 第三学年ノ成績考查ニ合格セサル者ニハ詮議ノ上修業証書ヲ授与スルコトアルヘシ
- 第三十三条 成績考查ニ関スル細則ハ別ニ之ヲ定ム

## 第六章 入学料及授業料

- 第三十四条 総テ入学ヲ許可セラレタル者ハ入学料金拾円ヲ納付スヘシ
- 第三十五条 授業料ハ実験実習費ヲ含メ一年金二百二十円トス
- 第三十六条 授業料ハ一年ヲ左ノ三期ニ分チ每期ノ初メニ之ヲ徴収ス  
第一期（四月ヨリ八月ニ至ル） 金八十円  
第二期（九月ヨリ十二月ニ至ル） 金八十円  
第三期（一月ヨリ三月ニ至ル） 金六十円
- 第三十七条 休学ノ許可ヲ受ケタル者ハ其ノ休学期間内授業料ヲ徴収セス
- 第三十八条 休学中ノ者ニシテ学期ノ半途ヨリ出席スルニ至レル者ニハ其ノ月ヨリ一箇月ノ割合ヲ以テ学期ノ余月ニ封スル授業料ヲ指定期間内ニ一時ニ納付セシム
- 第三十九条 一旦納付シタル入学料、入学検定料及授業料ハ何等ノ事由アルモ之ヲ返付セス

## 第七章 特待生

- 第四十条 品行方正ニシテ学業ノ成績特ニ優秀ナル者ハ学校長之ヲ選シテ次学年間特待生トナスコトアルヘシ
- 第四十一条 特待生ハ授業料ヲ徴収セス

第四十二条 特待生ニシテ其ノ資格ヲ失ヘル時ハ特待生タルコトヲ罷ム

## 第八章 研究生

- 第四十三条 本校又ハ他ノ実業専門学校卒業者ニシテ既修ノ学科ニツキ更ニ研究セントスル者アル時ハ詮議ノ上研究生トシテ二年以内在学ヲ許可スルコトアルヘシ
- 第四十四条 研究生タラント欲スル者ハ研究セント欲スル事項及在学ノ期間ヲ具シタル願書ヲ学校長ニ差出スヘシ
- 第四十五条 研究生ハ本校内ニ於テ研究ニ従事スルモノトス但シ必要ノ場合ニハ或ル期間ヲ限り指導教授ノ指揮ノ下ニ学校外ニ於テ研究セシムルコトアルヘシ
- 第四十六条 研究生ハ其ノ研究事項ノ研究ヲ終リタル時ハ研究報告書ヲ学校長ニ差出スヘシ
- 第四十七条 学校長ハ研究報告書ヲ考査シ其ノ成績佳良ナリト認メタル時ハ証明書ヲ授与ス
- 第四十八条 研究生ノ入学検定料及入学料ハ之ヲ徴収セス
- 第四十九条 研究生ノ授業料ニ関シテハ第六章ノ規定ニヨル研究生ノ授業料ハ特別ナル場合ニハ詮議ノ上之ヲ免除スルコトアルヘシ

## 第九章 選科生

- 第五十条 本校所定ノ学科目中一学科目又ハ数学科目ヲ選ミテ専修セント欲スル者ハ詮議ノ上選科生トシテ入学ヲ許可スルコトアルヘシ
- 第五十一条 選科生トシテ入学ヲ許可スル者ハ左ノ各号ノ一ニ該当シ且身体検査ニ合格セル者タルヘシ
- 一、中学校ヲ卒業セル者
  - 二、三年以上引続キ航空工業ノ実習ニ従事セル男子ニシテ本校ニ於テ施行スル入学検定ニ合格シタル者
- 第五十二条 選科生ノ入学時期ハ毎学年ノ始メトス
- 第五十三条 選科生ノ在学期間ハ三年以内トス
- 第五十四条 選科生ニシテ成績考査ニ合格シタル者ニハ其ノ専修セル学科目ニツキ修業証書ヲ授与ス
- 第五十五条 選科生ノ入学検定料、入学料及授業料ハ本科生ニ同シ
- 第五十六条 選科生ハ許可ヲ得テ本校所定ノ制服制帽ヲ着用セサルコトヲ得

## 第十章 委託生

- 第五十七条 本校ハ官庁ノ委嘱アル時ハ設備ノ許ス限り委託生ヲ置クコトアルヘシ
- 第五十八条 委託生ハ本科生又ハ選科生トシテ入学セシム
- 第五十九条 委託生ハ許可ヲ得テ本校所定ノ制服制帽ヲ着用セサルコトヲ得

## 解説

東北学院航空工業専門学校は、昭和18年12月、東北軍管区より東北学院の「廃校命令」を受け、これを回避するために、昭和19年4月に開学を余儀なくされた学校である。航空工専の開学にあつては、



熊谷岱蔵

昭和18年度の東北帝国大学工学部航空学科の学科課程、教員構成を参考にしてきたことが、今回の調査によって明らかになった。

昭和18年度の東北帝国大学工学部航空学科の教授は5名で構成され、宮城音五郎（工学部長兼務、航空学第一講座担任、工博）、成瀬政男（航空学第五講座担任、工博）、棚沢泰（航空学第四講座担任、工博）、小林巖（理博）、中村重夫（授業嘱託、経済学士、後に東北学院大学教授となる。）らが名を連ねている。また、専任教官のほか東京帝国大学、東京工業大学の教授、並びに航空研究所、中島飛行機（株）、仙台鉄道局の技師らも非常勤となっていた。

東北学院航空工専の開学に際しては、出村悌三郎院長が熊谷岱蔵東北帝国大学学長に側面からの支援を依頼した結果、宮城音五郎、成瀬政男、棚沢泰教授らが中心となって検討したことが諒解される。従って、東北帝国大学工学部航空学科の学科課程表を参考にしたことは自然の成り行きであった。

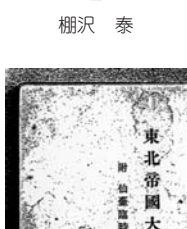
ただし、東北学院航空工専の学科課程には、修身(含キリスト教)、体操及び教練、国史、外国語、物理学、化学などの科目が組まれている。尚、非常勤として、後に東北学院大学工学部教授として赴任した坪内為雄（熱力学）、吉沢幸雄（熱力学）、



宮城音五郎

昭和18年度・東北帝国大学一覧  
(含工学部航空学科課程表)

成瀬政男



棚沢 泰

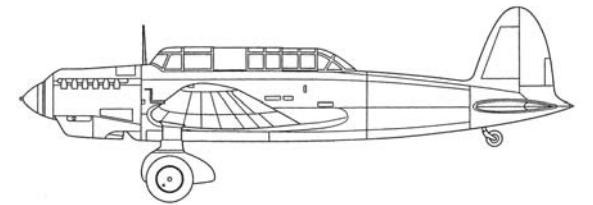
斉藤秀雄（機械力学）、松山徳蔵（材料力学）らが教授陣に加わっている。

[参考：東北帝国大学一覧（昭和18年度）、昭和19年12月10日発行]

また、昭和37年4月、東北学院大学工学部創設に際しては、成瀬政男、棚沢泰らの教授が、工学部設置準備委員会の諮問委員となり、再度、学科課程や人事について検討を依頼されている。東北大学と東北学院大学の理工系教育の関わりを知る上で興味深い内容となっている。（機械TG会報「さんえる」第36号、平成23年9月24日発行参照）

## 補遺（礼拝堂東側の飛行機について）

かつて、東北学院航空工業専門学校（現土樋キャンパス）の正門をくぐると礼拝堂の東側に2つの飛行機が教材として置かれていた。前述の萱場資郎が軍に依頼して設置したものである。これらの経緯は



九八式軽爆撃機（川崎航空機製・キ32）



礼拝堂東側に設置された九八式軽爆撃機（キ32）。航空工専生は後の佐藤寿郎教授。機体の後方に正門、右側奥に特別攻撃機が見える。

東北学院が軍に対して恭順の意を表すのにも効果があったと思われる。礼拝堂のすぐ東脇には、(株)川崎航空機製の九八式軽爆撃機、現在ある大学院の入口付近にはベニヤ板張りの単発特別攻撃機が置かれていた。写真誌「東北学院の100年」の82頁に掲載されている写真の中に、当時東北学院航空工専の学生だった佐藤寿郎教授(心理学担当)の後ろに見える飛行機は、正に川崎航空機製の九八式軽爆撃機である。

九八式軽爆撃機(キ32)は、昭和11年(1936)、陸軍の九三式単葉軽爆撃機の後継開発指示に(株)三菱重工業と(株)川崎航空機が参加、競作となった飛行機である。当初陸軍は、キ32を採用せず、三菱のキ30を九七式爆撃機として採用した。川崎では、昭和12年(1937)3月、キ32の試作第一号を完成し、初飛行を行っている。

九八式軽爆撃機(キ32)の仕様

全長 11.06m	最高速度 420km/h
全幅 15.0m	高度 3,500m
全高 2.90m	上昇限度 8,900m
翼面積 34㎡	航続距離 1,220km
自重 2,350kg	機銃 7mm 2基
最大重量 3.76kg	爆弾 450kg
プロペラ 3枚	エンジン川崎式(ハ9Ⅱ乙)1基
乗員数 2名	液冷V型12気筒、700馬力

九八式軽爆撃機は、胴体に爆弾倉をもつ単発の中翼機である。川崎航空機のエンジン(液冷)は、当時の国産エンジンとして高性能ではあったが、エンジントラブルが多く、また大型ラジエータからの水漏れが頻発したため、陸軍現場の整備員からは評判が悪かった。従って稼働率も低かったが、支那事変が起こり、三菱のキ30の生産が追いつかず、これを補充するために川崎にキ32の試作機増産の命令が出された。これを契機として、キ32は九八式軽爆撃機として制式採用されることになった。川崎では月産50機に及んだこともある。支那事変の中期以降は、近距離の主力爆撃機として各地で活躍した。太平洋戦争初期にはシンガポール、香港の攻略にも参加した。昭和17年(1942)以降は前線より引き上げ、訓練部隊や司令部飛行班などで使用された。

以上のことから明らかなように、九八式軽爆撃機は昭和18年(1943)頃から「現役引退」の実状にあり、教材としての活用は自然の成り行きと理解される。かつて萱場資郎は、第二師団歩兵第四連隊長の経歴がある石原莞爾に命令されて、ソ満国境の兵器偵察に赴いたことがあり、海軍の山梨勝之進大

将(仙台市出身)同様、これら軍関係者との面識は、東北学院航空工業専門学校の開設や、航空機の設置に少なからず好影響を与えていたものと考えられる。

明治時代の文芸評論家高山樗牛(日蓮崇拜者)と関わりがあった石原莞爾も日蓮宗信者であり、「高山樗牛瞑想の松」の碑を建立した萱場資郎も日蓮宗池上本門寺(東京都大田区)に眠るなど、三者をつなぐ運命の糸を垣間みることができる。

#### 【参考文献】

- (1)東北学院の100年：東北学院創立100周年記念百年史編集委員会、プレスアート、昭和61年5月15日
- (2)専門学校設置認可申請書：財団法人東北学院理事長出村悌三郎、国立公文書館所蔵、昭和19年2月29日付
- (3)東北帝国大学一覧：東北帝国大学、工学部航空学科・学科課程、昭和19年12月10日
- (4)大空の覇者：田中勝利・秋本実、講談社、平成11年3月15日

鶴本 勝夫プロフィール TSURUMOTO, Katsuo

1942(昭和17)年、仙台市生まれ。  
東北学院大学工学部機械工学科卒業(第1回生)。東北学院大学工学部助手、講師、助教授、教授を経て、現在東北学院大学名誉教授。

# 草創期の「東北学院報告」草稿

東北学院大学東北文化研究所客員  
中武 敏彦



東北学院報告

## はじめに

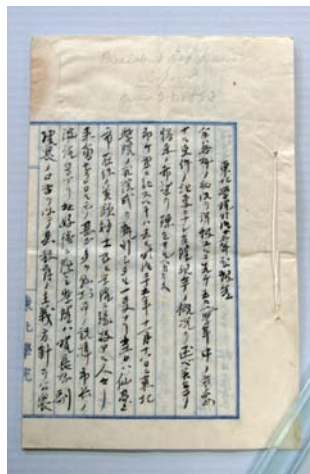
1890年代の草創期における東北学院の公的資料は、従来、宮城県に届け出た公文書である「宮城県庁文書」（県庁文書）と、理事局員による会議の議事録である「東北学院理事局記録」（理事会記録）が用いられてきた。実際、1990年（平成2）刊行の『東北学院百年史・資料編』においても、東北学院の初期の姿を描くために、県庁文書と理事会記録が主として所収されている。

しかしながら、県庁文書からは授業のカリキュラムや教師の履歴などこそ判明するものの、当該期の東北学院が抱えていた問題点については明らかにし得ない。また、理事会記録は議事録という資料の性格上、議題に上らなかった案件については当然触れられていないという資料的制約を持つ。そこで今回、上記二つの資料を補完するものとして、「東北学院報告」を紹介したい。

「東北学院報告」は、東北学院院長（押川方義）が東北学院理事局長（W.E.ホーイ、あるいはD.B.シュネーダー）に年一回提出した形式の報告書で、東北学院全体及び各学科の教況と改善すべき課題が記されている。先述の『百年史・資料編』には唯一、明治32年度の報告書が掲載されている（同書147-8頁）。ところで『百年史・資料編』刊行後、新たに明治25年度、同27年～29、31年度の5冊の報告書が

発見された。筆者は発見の経緯について直接知らないが、報告書が入っている袋の表書きによると、1996年（平成8）12月に資料室整理中に発見されたものであるという。これら5冊とも報告者は押川となっているが、原本を見ると年度により筆跡が異なる。このことから本書は、押川の下書きに基づき別の人間が清書したものと推測される。ただし袋書きには、押川の孫である故・押川昌一氏らの見立てにより、明治31年度の報告書は押川の直筆ではないかと記されている。また原本には、欄外に書込みがあったり、図書館の蔵書数等、数字上の報告が空欄になっている箇所もあることから、本書は報告の草稿であると思われる。

この5冊の「東北学院報告」のうち本稿では、紙数の関係もあり、明治25年度の報告書の全文を掲載したい。周知の通り1886年（明治19）5月に創設された仙台神学校は、東北学院へと改称し、1892年（明治25）11月18日に東北学院開院式が挙行された。すなわち明治25年度の「東北学院報告」は、東北学院として最初の報告書である。また末尾には、1888年（明治21）から1893年（明治26）までの入学・退学・卒業生数、報告書が書かれた時点（明治26年6月27日）での各学科の在生学生数も記されている。そのため従来必ずしも明確でなかった草創期の学生数を把握する意味からも、同書は貴重な資料の一つとなるであろう。



東北学院明治廿五年度報告

なお本稿では、仮名文字・当て字等について原則的に原文通り表記したが、旧字体の漢字のみ現代漢字に直していること、原文にはほとんどない読点を筆者が便宜的に付け加えていることを、あらかじめお断りしておきたい。

余ハ各科ノ状況ヲ詳報スルニ先チ、去ル一二学年中ノ重要ナル事件ノ記事ヲナシ、当院現今ノ概況ヲ述べ并セテ将来ノ希望ヲ陳セサルヘカラス

即チ第一ニ記スヘキハ、去ル明治二十五年十一月十八日ニ東北学院ノ開院式ヲ執行シタル一事ナリ、当日ハ仙台市在住ノ貴顕紳士及ヒ学院ニ縁故アル人々ノ来会セラレタルモノ甚ダ多く、県知事ノ祝辞、市長ノ演説等アリ、此好機ニ際シ学院ハ院長及副院長ノ口舌ヲ以テ其教育ノ主義方針ヲ公衆ニ告ゲ、大ニ賛同ヲ得タル者ノ如ク頗ル盛会ニテアリタリ、是ヨリ先本院ハ、官庁ノ許可ヲ得、又校舎建築ノ竣功アリタレバ、仮ニ開校シテ事業ヲ始めタルモ、内未ダ整理セサルトコロ多カリシヲ以テ稍其期ヲ延ヘタリシモ、当時既ニ内部モ稍整理セルヲ以テ、即チ茲ニ公然ノ開院式ヲ舉行セシナリ

次ニ録スヘキハ、二十五年六月三十日第一回卒業式ヲ執行シタル之ナリ、当日ハ院長、副院長ノ演説及ヒ卒業生ヘノ勸告等アリ、其他卒業生徒ノ歓迎ノ辞、演説文章朗読及告別ノ辞等アリ、此日卒業証書ヲ授与シタル生徒五名ニシテ、イトゞ静肅ナル会合ニテアリタリ

次ニ記スベキハ（明治廿四年十二）学院理事局ノ憲法ヲ制定シ、又規則ヲ改正シ、校規ヲ拡張シ東北学院ノ名称ヲ以テ始メテ世上ニ顯シ、我が校ハ夫ヨリ一大面目ヲ表ハシ世上ノ注意ヲ引クトコロトナリタル是ナリ、茲ニ又特書シテ吾人ノ大ナル希望ト喜ヲ述ヘサルベカラス、之レ我学院カ百年ノ大系ヲ籌リ基本金募集ニ着手シタル一事之ナリ、夫レ教育ハ永久ノ事業ナリ、宜シク遼遠ナル希望ト不撓ノ精神ト忍耐ヲ要ス、輕シク社会ノ変動ニ由リテ動揺セラレズ、確乎トシテ其主義ヲ貫キ、猥リニ他人ノ関涉ヲ受ケズ能ク教育ノ大義ヲ全フスヘキナリ、是レ我学院カ其独立ヲ要スル所以ナリ、而テ其独立ヲ維持シ其目的ヲ達セント欲セハ、必ず相応ナル基本金備ナカルヘカラス、吾人茲ニ慮ルトコロアリ、即チ内外有志ノ義心ニ訴ヘ金凡ソ二三拾万円ヲ募集シ、学院永遠ノ生命ヲ維持シ其盛大ヲ永久二期セント欲スル所以ナリ、之レー大事業ナリ、容易ニ其成功ヲ見ル能ハサルモ、漸々歩ヲ進メ終ニ此希望ヲ達セシコトヲ欲シ既ニ之ヲ募集シ始メタルニ、本邦人中ヨリハ大ナル賛同ヲ受ケ稍好結果ヲ表ハシ、纔カニ数月ヲ出デスシテ預約ノ金員殆ント二千弗垂トス、又北米合衆国リフォームド教会有志家中ニモ之ヲ贊助スルモノ多ント深く天父ニ感謝セサルヘカラス、若シ夫レ彼等ニシテ学院ノ実況ト本邦社会ノ大勢ヲ洞察スルニ於テハ、義捐ノ大挙ニ出ルヤ又疑フヘカラス、之レ素ヨリ数年ノ後ヲ期スヘキ事業トハ云ヘ、必ス志望成就ノ幸期ヲ見ル遠キニアラサルヲ信ス、願ク

ハ 全能ノ神著シキ誘導ヲ此上ニ垂レ賜ハンコトヲ

次ニ学院ノ多望トシテ期スヘキハ、近年ニ至リ私立学校ハ一般ニ生徒ノ数大ニ減少シ、殊ニキリスト教主義ノ学校ニ至リテハ最モ甚シトス、之カ原因タルニシテ足ラスト雖トモ、其重ナル者ハ、一方ニハ政府カ官立学校生徒ニ特別ナル權利ヲ恵与スルアリテ一見甚タ生徒ノ身上ニ便利アルカ如シ、又一方ニハ保守的ノ反動ノ潮勢甚盛ニシテ洋学ノ需用大ニ減シ、殊ニ非キリスト教ノ精神ヨリ其主義ノ学校カ其悪影響ヲ受ケタルトニ職由セスンハアラサルナリ

然ルニ我学院ハ、開校以來日猶淺キニモ閑ラス生徒ノ数年月ト共ニ増加セリ、此数年ノ經驗ニ由リテ将来ヲ推考スレハ、多年ヲ待タスシテ必ス校舎ノ狹隘ヲ感スルニ至ラン、今ニ於テスラ既ニ其感ナキ能ハス、其当局ノ諸士時機ヲ誤ラス宜シク之カ計ヲナサレンコトヲ希フ

以上ハ本院ノ全体ニ関スル報告ノ要領ト将来希望ノ一斑ヲ述ヘタルナルカ、是ヨリ進テ各科ニ付一々其要點ヲ掲クベシ

予備科 本科ハ從來<sup>(77)</sup>其科程二年ナリシカ、昨年ヨリ一年ヲ加ヘテ三年トナシタリ、又修身科ノ如キハ一週一回生徒一同ヲ講堂ニ集メ全体ニ教授シタリシカ、当学期ノ始ヨリ各級毎週一回ノ修身科ヲ設ケ大ニ明德ノ道ヲ講究セリ、数月ノ經驗未タ其利害ヲ判断スヘカラスト雖トモ良好ノ成績アルモノノ如シ○之レ直訳誦教員トシテ働カレ居タル奥太郎氏ハ去ル三月東京帝国大学ニ移ランカ為メニ其職ヲ辞サレ、一時ハ良教師ヲ失シヲ慨キシガ、其後任トシテ入江祝衛氏来校アリ、大ニ教授ニ骨折ラレシテ以テ此欠ヲ補ヒシノミナラス又成績ノ見ルヘキモノアリ、又画学科ニモ久シク良教師ヲ得ル能ハスシテ遺憾トシタルトコロ、当学期末ヨリ一名ノ教師ヲ聘用シタレバ将来ハ斯学ノ進歩モ亦見ルヘキモノアラン、英学部ハ久シク外国ニアリ語学ノ道ニ明ナル教師担任セラレ居レバ数年ノ後ハ著シキ進歩ヲ見ルヲ得ベシ、尤モ此科ニ於テ弱点トシテ欠点トスル所ヲ熟察スレハ矯正スヘキ弊甚タ多カルヘシ、弥進ンテ完全ノ位置ニ達セシムルハ吾党ノ任務ナリトス

猶本科ニテ注意スヘキハ、従前ヨリ入学試験ノ際寬嚴其宜シキヲ得サル事アリシ為メカ、同級生徒中ニ学力ノ不同甚シク進歩上互ノ妨害トナリシコト少カラス、依テ来学年ヨリハ試験其宜シキヲ得テ此弊ヲ改メ、成ルヘク一級ノ生徒ノ学カヲ同格ナラシムル様注意センコトヲ期ス○来学年ヨリハ予科ノ教場必ス狹隘ニシテ教授上大ニ不都合ヲ感スヘケレハ、今ヨリ之レカ準備ヲナサ、ルヘカラス、理事局ハ之ニ對シテ適宜ナル處弁アランコトヲ希フ○本科ニ限リ来学年ヨリ土曜日ノ休業ヲ廢シ午前丈授業シテハ如何、当局者ノ判定ヲ仰ク

本科 本科ニテハ従前数学、物理及政治学ノ三科ニ付満足ナル教授ヲ施スコト能ハス遺憾少カラサリシカ、前学期より村上春太郎氏来校シ専ラ高等数学、物理及天文ノ三科目ヲ教授セラル、ヲ以テ大二其学ノ進歩ヲ見ルヲ得タリ、又法学士村松山寿氏名誉講師トシテ一周二回ノ来講アルヲ以テ此学モ進歩ノ微アリ、熟ラ学院生徒学業上実力ノ如何ヲ熟察スルニ、彼等常ニ業務ニ追ハレ、学得シタル科目ノ要領ヲ熟読吟味スルノ暇ナキモノ、如シ、教授タルモノハ宜シク其原因ノ果シテ何レニアルヤヲ考究スベシ、之レ或ハ学科ノ余リニ繁雜ナルト、科程書ヲ多ク英語ニ取リシコト、且ツ難解ノ書籍ヲ科程書ニ採用シタルト教授法未ダ其宜シキヲ得サル、之レ等数原因ノ然ラシムルトコロニアラサルナキヲ得ンヤ、果シテ然ラバ之ヲ矯正スルノ道筋◇易解ノ科程書ヲ選定スルコト◇邦語ヲ用イテ教ヘ得ラル、科目ハ之ヲ邦語ニテ教授スルコト◇別ニ一良法ヲ設ケテ大二英学ヲ奨励シ英学読書ノ実力ヲ養成スルコト、又各教師宜シク教授法ヲ講究シ最良ノ方法ニ從ヒ教授スルコト等ナリトスヘシ、当局ノ士宜シク熟議判定アランコトヲ乞フ

来学年ヨリハ本科二年以上ノ者ノ為メニ撰科ナルモノヲ設ケ、一ハ将来専門科ヲ修ムルモノ、為ニシ、一ハ種々ノ事情ニヨリテ到底正科ヲ蹈ミ能ハサルモノ、為ニ便ナラシムルコト

ミロル氏ハ昨年 月熊谷氏ハ昨年 月来院アリ、ミロル氏ハ専ラ本科及ヒ英語神学部、熊谷氏ハ専ラ予科英語部及ヒ英語及邦語神学部ヲ教授セラル、差シ当リ本院二要スルところハ数学及ヒ漢学教師ト威厳アル体操教師有力ナル訳読教師各名ナリ、予科一年ヨリ一週一回若クハ少クトモ二週一回ノ和漢作文科ヲ設ケナバ、本科二年ニ至ルトキハ生徒ハ必ス通常ノ論文ヲ綴リ得ルニ至ラン、然ルニ目下一名ノ漢学教師ニテハ需メニ応スル能ハス、之レ和漢学教師一名ノ増加ヲ要スル所以ナリ、体操科ハ德育ト共ニ体育必要ノタメ大二奨励セサルヘカラス、之レカ教員タルモノハ生徒ノ威信ヲ受クニ足ルヘキ人ナラサル可カラス、之レ適當ナル体操教員一名ヲ要スル所以ナリ、生徒ニ読書ノ実力ヲ与ルニハ有力ナル訳読教師ノ補助ヲ仰カサルヘカラス、然ラサレハ読了シタル書籍ノ意義臚トシテ徹底セサル感ナキ能ハス、之レ有力ナル訳読教師一名ヲ要スル所以ナリ

神学科 本科英語部ニ而ハ授業上稍満足ナル姿ヲナセトモ尚有力ナル日本神学教師ヲ増聘スルヲ得ハ更ニ完備ノ域ニ達スヘシ○邦語部ノ為メニハ一名ノ神学教師必要アリ、邦語部ハ生徒ヲ二種ニ別チ一種ハ完備ナル学理ヲモ講究セシヲ、一ハ実践的伝道者ヲ養成スルヲ目的トシ以テ目下ノ急務ニ応セシムヘシ

(欄外に以下の通りの記述あり)

神学生徒ヲシテ自給ト勞力ノ精神ヲ奨励センカ為ニ、別ニ労働会ノ如キモノヲ設ケ専ラ学業ノ余暇自給ノ道ヲ実行セシメ、其中ヨリ有望ノ生徒ヲ選抜シテ貸費生トスルコト

生徒一般ノ体育ノ振起ナカルヘカラス、之レカ為メニ必要ナルハ広濶ナル運動場ト之レヲ奨励スルニ必要ナル用具ナリトス○今一ツ最モ必要ナリト認ルモノハ完備ナル寄宿舎ヲ設ケサルヘカラス、之レ德育、体育上最モ必要ナレバ充分意匠ヲ凝ラシテ整備シタル建物ノ必要アリ

図書館ハ既ニ買入レタル洋書 冊、和漢ノ書籍 冊、又寄付ヲ受ケタル書籍 冊アリ、猶新タニ購入スヘキ書籍及理科器械夥多アリ

運動場及ヒ体操器械、書籍、理科器械、教場、寄宿舎及試験場、之等ハ皆必要ナリト雖トモ目下經濟普通ノ經費ヨリ之レヲ經營シ能ハサレハ、他ニ良好ナル工夫ヲ旋ラン漸々完備ヲ期スヘキナリ

学院幹事ノ欠員ヨリ事務整理ノ点ニ於テ遺憾少カラサリシカ、前学期末ヨリ齊藤壬生雄氏来校アリ、専ラ本院事務ノ整理ニ執掌セラル、ヲ以テ本院前般ノ事務大二面目ヲ改ムルアラン、之レ本院ノ幸トナサザルベカラズ

本院ノ事業タル前途悠遠ニシテ希望甚タ大ナリ、忍耐ト精勵ヲ以テ其成功ヲ多年二期セサルヘカラス、吾人ハ一定ノ方針ニ從ヒ、改々屹々漸々其歩ヲ進メ同一ノ精神ヲ發揮シ日本百年ノ大系ヲ籌リ、天父ノ大能ニヨリ真正教育ノ隆盛ヲ希図スルハ吾党ノ責任ナリトス、願ハクハ天父ノ恩寵ト同志ノ祐助ノ加ルアランコトヲ

明治廿六年六月廿七日 東北学院長 押川方義

東北学院理事局長

ダブリュー イー ホーイ殿



明治二十六年六月廿八日調査表

	入学	退学	卒業	年末現在
二十一年	二人			二人
二十二年	十三人			十五人
二十三年	四人			十九人
二十四年	六十五人	一人	二人	八十三人
二十五年	百二十人	六十三人	三人	百四十人
二十六年	五十四人	十八人	三人	百七十六人

現在生徒出席数

予備学校

一年級	三十二人
二年級	二十八人
三年級	十九人
合計	七十九人

普通学校

一年級乙	廿五人
一年級甲	二十人
二年級	十三人
三年級	十四人
四年級	四人
合計	七十六人

神学校

	邦語部	英語部
一年級	十三人	三人
二年級	○	二人
三年級	三人	○
合計	十六人	五人

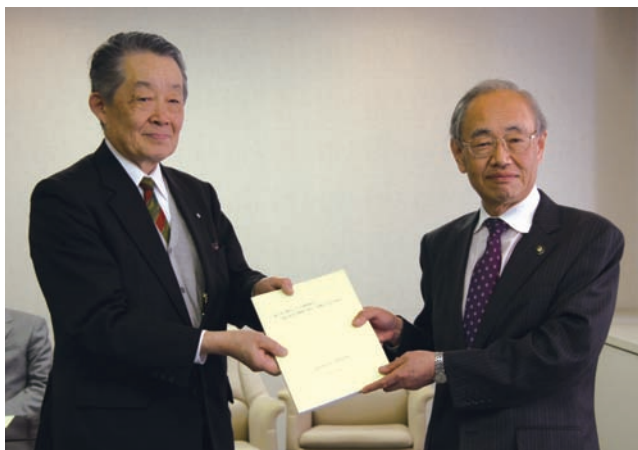
総計 現在生徒 一百七十六人

中武 敏彦プロフィール NAKATAKE, Toshihiko

1970(昭和45)年生まれ。  
立命館大学産業社会学部卒業。  
東北学院大学大学院文学研究科後期課程満期  
退学。

## 「東日本大震災による多賀城市の被災状況の調査と復旧・復興に向けた提言」報告書贈呈

教育をはじめとした様々な分野で多賀城市と連携協定を結んでいる本学は、東日本大震災における被災状況の調査と、復旧・復興に向けた技術的なアドバイスや、安心・安全なまちづくりの実現に向けた提言をまとめた「東日本大震災による多賀城市の被災状況の調査と復旧・復興に向けた提言」報告書を多賀城市に贈呈した。



星宮望大学長（左）と菊地健次郎多賀城市長

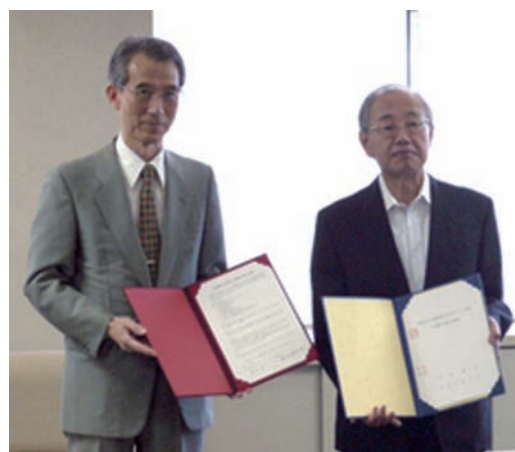
4月26日、多賀城市役所にて行われた贈呈式で、星宮望大学長から報告書を手渡された菊地健次郎市長は、あいさつの中で「この提言書を参考に、今後の多賀城市の復興に是非役立てたいと思います。大変感謝しております」と述べた。

## 多賀城市と「災害時における施設使用及び学生ボランティア活動の支援協力に関する協定」を締結

7月4日、多賀城市と東北学院大学は、「災害時における施設使用及び学生ボランティア活動の支援協力に関する協定」を締結した。

同協定は、災害発生時に多賀城市の申し出により本学の施設を貸し出すと共に、学生ボランティアによる支援活動を行うなどの内容を盛り込んでおり、今後、災害に対して相互に連携して対応していく体制を構築するものである。

当日は、多賀城市役所において、多賀城市の菊地健次郎市長と本学の伊達秀文工学部長との間で、協定書の取り交わしが行われた。



伊達秀文工学部長（左）と菊地健次郎市長

# 東北学院大学工学部設置50周年記念事業

キリスト教による人格教育を基礎とし、社会に貢献する幅広い教養と正しい倫理観を備えた技術者の育成を目指して1962年に設置された工学部が、50年の節目を迎えた。

## <記念式典>

設置50周年を記念して、11月10日、多賀城キャンパス礼拝堂において式典が開催され、関係者の他多くの卒業生が参列した。

星宮望学長は式辞の中で、「東北学院創立75周年の一環として設置された工学部は、科学技術の日進月歩の環境に対応するべく、これまで幾度となく変化を遂げてきました。今後は東北地方において工場誘致が予想され、より大きなものとなっていく本学工学部の使命を果たすため、工学部の発展に向けてより一層の努力をしてまいります」と述べた。



多賀城キャンパス正門



記念式典

## <記念講演会・祝賀会>

式典後、江陽グランドホテルに会場を移して開催された記念講演会では、宮城県産業技術総合センター所長の伊藤務氏が「東北における産業の今後の展開と地元大学の役割」と題して講演を行った。

また、引き続き開催された祝賀会には、同窓生をはじめとした多くの方々が来場し、来賓から心のこもった祝辞や激励を多数いただいた。



宮城県産業技術総合センター所長の伊藤務氏



記念祝賀会

## 東北学院幼稚園創立50周年記念礼拝・コンサート開催

1962（昭和37）年4月、「教育を通じて、この地に、神の言葉の種を播きたい」との強い願いで多賀城の地に誕生し、4人の教師と74名の園児で出発した東北学院幼稚園が、50周年を迎えた。この50年の間に巣立っていった園児は40,181名にのぼる。

11月10日、全園児と保護者の他、多くの関係者が集い「50周年記念礼拝・コンサート」が、東北学院大学多賀城キャンパス礼拝堂において開催された。

佐々木勝彦園長からのお話と星宮望院長の祝辞の後、年長児の元気な歌声で始まったコンサートは、全園児による合唱、PTAのサークル活動としてスタートした合唱団「コールマーガレット」の皆さんの合唱とプログラムが進み、最後にパイプオルガンの演奏を心静かに聴きながら、皆で節目の年のお祝いをした。



全園児による合唱

# 東北大学片平キャンパス南地区（一部）売買契約を締結

東北学院と東北大学は1月28日、東北大学片平キャンパスで会見を開き、東北大学片平キャンパス南地区（一部）売買契約が締結したことを報告した。

会見に出席した東北学院平河内健治理事長は「東北大学片平キャンパスの一部取得が可能となり、老朽化した土樋キャンパスの建物の建て替えが順次可能となります。東北学院大学総合キャンパス整備事業を進展させる意味で、大きな一歩を踏み出せます」と、今後の土地活用などについて述べた。



平河内理事長（左）と東北大学里見進総長



## 東北大学片平キャンパス南地区（一部）に係わる売買契約概要

### 【売買物件】

- ・所在地：仙台市青葉区片平二丁目1番11（電気通信研究所南側）
- ・敷地面積：7,950㎡
- ・使用状況：テニスコート・駐車場 等

### 【契約締結日】

平成25年1月28日

### 【引き渡し時期】

平成26年2月末（予定）

### 【売買物件の利用計画】

高等教育機関としての教育研究用地として利用

時 事

2012年4月～2013年3月

東北学院に関する主な時事		東北学院に関する主な時事			
2012年 4月	2日	役職者等辞令交付式／人事異動辞令交付式／新任職員辞令交付式／総務担当副学長に佐々木俊三氏／榴ヶ岡高等学校長に湯本良次氏／文学部長に辻秀人氏／経営学部長に菅山真次氏／広報部長に遠藤健一氏／学生部長に石塚秀樹氏、施設部長に木村安博氏／大学新入生オリエンテーション（～8日）	6月	15日	TG十五日会
		新入生オリエンテーション初日に泉キャンパスでは初めて、新入生を対象とした避難訓練を実施		16日	青山学院大学との共同イベント「まちかど学ing」開催／2012年度レクチャーコンサート「時代の音」（第1回）「16世紀から21世紀の様々なオーボエ」
	4日	大学入学式（交通事情により開式の時間変更午前10：30⇒午後3：00）		21日	大学院特別選考（A日程）入学試験
	6日	中学校1年・高等学校1年学習オリエンテーション（～7日）		22日	対北海学園大学総合定期戦（本学主管）（～24日）
	9日	中学校・高等学校入学式／榴ヶ岡高等学校入学式	26日	工学部学生総会	
	10日	幼稚園入園式	30日	学部オープンキャンパス：文学部・経済学部・経営学部・法学部（土樋）・工学部（多賀城）	
	13日	TG十五日会	7月	2日	大学院特別選考（A日程）合格発表
	18日	幼稚園PTA総会		4日	多賀城市と「災害時における施設使用及びボランティア活動の支援協力に関する協定」を締結
27日	榴ヶ岡高等学校奨学会総会	7日		教養学部オープンキャンパス（泉）	
28日	中学校・高等学校奨学会総会	13日		TG十五日会	
5月	9日	大学春季宗教教育強調週間特別伝道礼拝（～10日）		14日	私立大学フォーラム開催／中学校・高等学校オープンキャンパス
	10日	中学校・高等学校運動会		20日	総合学術誌「震災学」vol.1を発刊
	15日	創立126周年記念式典／墓前礼拝／TG十五日会		22日	県中学校総体（～26日）
	16日	多賀城市との連携協力協定事業の一環として開催する「地域市民のための大学公開講座」（～7月4日まで毎週水曜日：計8回）		27日	朝日新聞出版発行「東北学院大学 by AERA」発売
	17日	榴ヶ岡高等学校総体壮行会	8月	4日	全学オープンキャンパス（泉）／（多賀城4・5日）
	22日	幼稚園遠足		6日	第38回大学宗教部「サマー・カレッジ」開催（～8日）
	26日	大学後援会総会		17日	平成24年度多賀城スコール（サマースクール）（20日～23日）
30日	名誉教授称号記授与式／「東北学院グリーンキャンパス2012」を宣言	23日		全学職員研修会	
6月	1日	6月1日付人事異動に伴う辞令交付式	25日	榴ヶ岡高等学校オープンキャンパス／幼稚園オープンキャンパス	
	2日	対青山学院大学総合定期戦（青山学院大学主管）（～4日）／県高等学校総体（～4日）	9月	7日	榴ヶ岡高等学校「榴祭」（～8日）
	9日	市中学校総体（～11日）		8日	中学校・高等学校「学院祭」（～9日）
	14日	大学進学指導者懇談会／日本語研究講座30回記念・アメリカ研究夏期留学40回記念行事開催		13日	TG十五日会
		14日		法科大学院前期日程入学試験合格発表	
			15日	幼稚園運動会	

東北学院に関する主な時事		東北学院に関する主な時事			
9月	27日	大学院特別選考（B日程）入学試験および一般（秋季）入学試験	2013年 1月	18日	企業研究セミナー開催（～20日）
	28日	9月期卒業証書・学位記授与式		19日	大学入試センター試験（～20日）
10月	2日	大学秋季宗教教育強調週間特別伝道礼拝（～3日）	2月	26日	法科大学院後期日程入学試験（～27日）／保護者との就職懇談会（多賀城キャンパス）
	5日	大学院特別選考（B日程）入学試験および一般（秋季）入学試験合格発表		28日	東北学院と東北大学が片平キャンパス南地区（一部）売買契約締結を発表／高等学校入学試験
	7日	工学部祭・泉キャンパス祭（～8日）／工学部・教養学部オープンキャンパス（～8日）		30日	榴ヶ岡高等学校入学試験
	11日	編入学試験（A日程）		31日	高等学校入学試験合格発表
	12日	TG十五日会／六軒丁祭（～14日）		1日	大学一般入学試験前期日程（～3日）
	19日	編入学（A日程）合格発表		2日	榴ヶ岡高等学校入学試験合格発表
	25日	ドラフト会議で硬式野球部：伊藤祐介選手がソフトバンクから2位指名		8日	法科大学院後期日程入学試験合格発表
26日	東北地区工学系私立大学懇談会	9日	レクチャーコンサート「時代の音」（第3回）『吹奏楽とマーチングバンドの起源』		
27日	ホームカミングデー開催／幼稚園造形展（～28日）／幼稚園オープンキャンパス	10日	大学一般入学試験前期日程・センター試験利用入学試験前期・外国人留学生特別入学試験合格発表		
11月	10日	東北学院大学工学部設置50周年記念式典開催／東北学院幼稚園創立50周年記念コンサート開催 レクチャーコンサート「時代の音」（第2回）『ヘンデルとバッハが聴いたオーボエ』	13日	TG推薦誓約式	
	14日	TG十五日会	15日	TG十五日会	
	15日	大学推薦入試	20日	大学院春季入学試験（～21日）	
	17日	東北学院文化講演会2012（山形）	1日	高等学校卒業式／榴ヶ岡高等学校卒業式／大学院春季入学試験合格発表	
	24日	大学推薦入試合格発表	4日	転学部・転学科試験、編入学試験B日程、社会人特別入学試験B日程、再入学試験	
12月	14日	第63回公開東北学院クリスマス／TG十五日会	5日	大学一般入学試験後期日程	
	18日	幼稚園クリスマス	7日	法科大学院の学生募集停止について記者発表	
	20日	中学校・高等学校公開クリスマス	8日	総合学術誌「震災学」vol.2を発刊	
	21日	榴ヶ岡高等学校クリスマス	12日	大学一般入学試験後期日程、センター利用入学試験後期、社会人特別入学試験B日程、編入学試験B日程、転学部・転学科試験合格発表	
	25日	多賀城スコーレ・ウィンタースクール開催（～27日）	15日	卒園式／TG十五日会	
2013年 1月	7日	中学校入学試験	25日	中学校卒業式	
	8日	中学校入学試験合格発表	26日	卒業・学位記授与式	
	15日	TG十五日会	27日	「押川方義とその時代」発行	
			29日	デフォレスト館（旧シップル館）国の登録有形文化財に登録	

## 受贈資料一覧

2012年4月～2013年3月

日付	寄贈者	受贈資料
2012.4	仁昌寺正一	キリスト教教育と近代日本の知識人形成(2)：東北学院を事例にして
2012.4	東京大学史料室	巽軒日記：自明治三三年至明治三九年
2012.4	皇學館館史編纂室	皇學館大学の再興と発展：昭和二十一年～平成二十三年
2012.4	東京経済大学	稿本 大倉喜八郎年譜 [第3版]
2012.4	東北公益文科大学公益総合研究センター	平成23年度(復興支援)被災者に対するカウンセリング、調査活動事業報告書
2012.5	沼倉研史	偲ぶ草：沼倉満帆(旧姓高田)の生涯
2012.5	神奈川大学広報部	学問への誘い：大学で何を学ぶか
2012.5	三陸河北新報社	大津波襲来：石巻地方の記録
2012.5	仙台赤十字病院	仙台赤十字病院 東日本大震災記録集
2012.5	東北薬科大学	東日本大震災の記録：2011.03.11-
2012.5	石巻専修大学	東日本大震災：石巻専修大学報告書
2012.5	仙台市	東日本大震災 1年の記録：ともに、前へ仙台
2012.5	伊藤大介	子ども岩沼市史
2012.5	菊池孝育	蒼々たる天に：日本キリスト教団下ノ橋教会牧師土田熊治の生涯
2012.5	芝浦工業大学	芝浦工業大学の歩み：1927-2011
2012.5	東北学院大学工学総合研究所	東日本大震災による多賀城市の被災状況の調査と復旧・復興に向けた提言
2012.5	広島大学文書館	広島大学自校史教育実施報告書 2001-2010(下巻)
2012.5	学校法人皇學館	皇學館大學百三十年史 総説篇
2012.6	菅野邦男	花輪庄三郎愛用の聖書・他
2012.6	森迪康	押川方義揮毫「天顕神之栄光」
2012.6	仙台東一番丁教会	日本基督教団仙台東一番丁教会130年史 資料編 1
2012.6	岩手大学	「岩手の復興と再生に」オール岩大パワーを：東日本大震災から1年間の取り組み
2012.7	沼倉研史	Hattie Lucretia Gring 書簡集(CD-ROM)
2012.7	青山正彦・関俊一郎	3Lは輝きて、いま 一二七会60周年記念文集一
2012.7	不二出版株式会社	『救世』解説・総目次・索引
2012.7	宮城豊彦	「地域災害と環境脆弱性の克服 国際会議と地域会議」に関する報告書(概要版)
2012.7	東北学院大学	震災学 創刊号
2012.7	東北学院大学	東北学院大学 by AERA
2012.10	キリスト教学校教育同盟	キリスト教学校教育同盟百年史
2012.10	キリスト教学校教育同盟	キリスト教学校教育同盟百年史 資料編
2012.10	学校法人宮城学院	学校法人宮城学院 東日本大震災の記録
2012.10	学校法人トヨタ学園	豊田工業大学30年史
2012.10	小松隆二	社会教育に生涯を捧げた人：小松謙助氏を偲ぶ・他
2012.11	ミネルヴァ書房	島崎藤村 一「一筋の街道」を進む一
2012.11	関西学院大学博物館開設準備室	新劇、輝きの60年代 大阪労演とその時代Ⅱ 1960-1969
2012.11	同志社女子大学	女性宣教師「校長」時代の同志社女学校(1876年-1893年) 下
2012.11	同志社女子大学	同志社の母 新島八重
2012.12	國學院大學	國學院大學130周年記念誌
2012.12	慶應義塾	慶應義塾150年史資料集 1
2012.12	工学院大学	工学院大学 学園百二十五年史 工手学校から受け継ぐ実学教育の伝統
2012.12	学校法人追手門学院	マンガ 追手門の歩み
2012.12	布施協三郎	若き洋画家 布施淡 明治の恋と青春
2013.1	日本女子大学成瀬記念館	故郷を愛す、国を愛す、世界を愛す 上代タノ
2013.2	学校法人立正大学学園	立正大学の百四十年
2013.2	南三陸町教育委員会	南三陸町立戸倉小学校 避難と復興の記録
2013.3	学校法人昌平學(東日本国際大学・いわき短期大学)	3・11からの挑戦
2013.3	学校法人二階堂学園	二階堂学園90年：学園は今
2013.3	学校法人弘前学院	弘前学院120年史
2013.3	立教学院史資料センター	遠山郁三日誌1940～1943年 戦時下ミッション・スクールの肖像

※他逐次刊行物類多数をご寄贈いただきました。感謝申し上げます。



# 東北学院資料室規程

## (設置および名称)

第1条 本院に、東北学院資料室（以下「資料室」という。）を置く。

## (目的)

第2条 資料室は、本院に関する歴史を将来に伝承するとともに、「建学の精神」に関連する資料を収集・保存・展示し、本院の発展に資することを目的とする。

## (事業)

第3条 資料室は、第2条の目的を達成するために、以下の事業を行う。

- 一 資料の収集、整理、および保存に関すること。
- 二 資料に関係する刊行物の編集および出版に関すること。
- 三 資料の展示および公開に関すること。
- 四 資料の閲覧および貸出に関すること。
- 五 資料に関係する情報の提供に関すること。
- 六 その他、必要と認められる事業に関すること。

## (運営委員会の設置)

第4条 資料室の事業を運営するため、東北学院資料室運営委員会（以下「運営委員会」という。）を設ける。

## (運営委員会の構成)

第5条 運営委員会は、次の者をもって構成する。

- 一 学院長
  - 二 総務担当副学長、宗教部長、総務部長、総務部次長、総務課長
  - 三 中学校・高等学校副校長1名、榴ヶ岡高等学校副校長、中学校・高等学校事務長、榴ヶ岡高等学校事務長、幼稚園教頭
  - 四 法人事務局長、庶務部長、広報部長、庶務課長、広報課長
- 2 運営委員会は学院長が招集しその議長となる。
  - 3 運営委員会のもとに、必要に応じて実務委員会を設けることができる。実務委員は、運営委員会の議を経て委員長が任命する。
  - 4 運営委員会の事務は、広報課が行う。

## (資料室の管理・事務)

第6条 資料室の管理・事務は、広報課がこれを行う。

## (規則の改廃)

第7条 本規程の改廃は、運営委員会の議を経て理事会が行う。

## 附則

本規程は、平成13(2001)年4月1日から施行する。

## 附則

本規程は、平成15(2003)年4月1日から一部改正施行する。

## 附則

本規程は、平成23(2011)年3月9日から一部改正施行する。

# 東北学院の沿革

年 代	歴代役職者	事 項
1886(明治19)年		W.E.ホーイ仙台着任(1月)。押川方義、W.E.ホーイ兩名により、キリスト教伝道者養成の目的をもって仙台市木町通に「 <b>仙台神学校</b> 」開設(5月)。教師2名、生徒6名で始まった。E.R.プルボー、M.B.オールドが来日(7月)、宮城女学校を創立(9月)。
1887(明治20)年		東二番丁の本願寺別院跡を取得し、仙台教会と仙台神学校を移転(5月)。
1888(明治21)年		D.B.シュネーダー夫妻仙台着任(1月)。オールド記念館落成(11月)。
1891(明治24)年		南町通りに仙台神学校校舎が完成(9月)。校名を「 <b>東北学院</b> 」と改称し、神学生のみに限らず、広く生徒を募集し、普通科を設置。予科2年・本科4年・神学部3年とする。
1892(明治25)年	押川方義	<b>労働会創設(3月)</b> 。東北学院理事局を組織、 <b>初代院長に押川方義、副院長・理事局長にホーイ就任(8月)</b> 。東北学院開院式(11月)。
1895(明治28)年		予科・本科を改組し、普通科5年、その上に専修部(文科・理科)2年を設置。
1896(明治29)年	W.E.ホーイ	島崎春樹(藤村)、作文・英語教師として着任。
1898(明治31)年		理科専修部を廃止。
1900(明治33)年		第2代理事局長にD.B.シュネーダー就任(10月)。
1901(明治34)年		<b>第2代院長にD.B.シュネーダー就任</b> 。普通科長に笹尾糸太郎就任(4月)。普通科に制帽を制定。徽章TG章制定。
1903(明治36)年		<b>東北学院同窓会結成</b> 。
1904(明治37)年		全校を普通科(5年)と専門学校令による専門科(3年)とに分け、専門科に文学部と神学部とを置く。専門科長に出村悌三郎就任(4月)。
1905(明治38)年		専門科を専門部、文学部を文科、神学部を神学科と改称。 <b>東二番丁に普通科校舎完成</b> 。専門部に角帽を制定。徽章は全校TG章を用いる。普通科長に田中四郎就任(9月)。
1906(明治39)年		普通科寄宿舎完成。
1908(明治41)年		「 <b>社団法人東北学院</b> 」設置。創立記念日を5月15日に定める。同窓会会報第1号発行。
1910(明治43)年		校旗制定。
1911(明治44)年		<b>創立25周年記念式典挙行</b> 。
1915(大正4)年		普通科を中学部と改称(5月・生徒数357名)。中学部長は田中四郎。
1916(大正5)年		<b>『東北学院時報』創刊(1月)</b> 。南六軒丁(現大学土樋キャンパス)に専門部校地取得。
1918(大正7)年		専門部を改組、神学科・文科・師範科・商科とする。
1919(大正8)年		仙台大火のため中学部校舎・寄宿舎全焼(3月)。仮校舎建築(9月)。



年代	歴代役職者	事項
1920(大正9)年	 五十嵐正	中学部長に五十嵐正就任(1月)。
1921(大正10)年		中学部寄宿舎再建(9月)。
1922(大正11)年		中学部校舎再建〈東二番丁・通称赤レンガ校舎〉(6月)。
1923(大正12)年		東北学院教会設立(5月)。
1925(大正14)年		神学科を専門部より分離し、神学部(第1科・第2科)とする。専門部は文科、師範科、商科となる。
1926(大正15)年	 出村悌三郎	南六軒丁に専門部校舎完成(現大学本館)、9月より使用。創立40周年記念式ならびに専門部校舎落成式を挙行(10月)。
1928(昭和3)年		専門部3科とも予科を廃止、4年制とする。ハウスキーパー記念社交館完成(3月)。
1929(昭和4)年		専門部を高等学部と改称。神学部第2科を廃止、第1科を神学部本科と改称し、3年の予科を置く。「財団法人東北学院」と改組(8月)。
1930(昭和5)年		高等学部師範科に専攻科1年を置く。
1932(昭和7)年		高等学部は3学期制を2学期制に改める。ラーハウザー記念東北学院礼拝堂完成(3月)。労働会寄宿舎を廃止。中学部寄宿舎を廃止し、神学部寄宿舎をその跡に移す。
1933(昭和8)年	高等学部制帽を角帽より丸帽に改める。	
1934(昭和9)年	神学部、南六軒丁ブラッドショウ館に移る。	
1936(昭和11)年	 E.H.ゾーグ	高等学部文科を文科第一部、師範科を文科第二部と改称。創立50周年記念式典を挙行。院長シュネーダー、「我は福音を恥とせず」と題する説教を行う。第3代院長に出村悌三郎就任(5月)。旧労働会建物および敷地を売却。第3代理事長にE.H.ゾーグ就任(6月)。
1937(昭和12)年		神学部廃止、日本神学校と合同(3月)。高等学部は3年制となる。高等学部長にゾーグ就任(4月)。
1938(昭和13)年	中学部長に田口泰輔就任(4月)。	
1939(昭和14)年	中学部長に出村剛就任(4月)。	
1940(昭和15)年	 田口泰輔	南町通り旧神学部校舎および敷地を売却。東北学院維持会を組織。花淵浜高山に修養道場建築用地を取得。第4代理事長に出村悌三郎就任(10月)。
1941(昭和16)年		高等学部長に出村剛、中学部長に小泉要太郎就任(4月)。
1942(昭和17)年	 小泉要太郎	高等学部商科第二部および中学部第二部を設置(ともに夜間)。
1943(昭和18)年		高等学部商科を高等商業部、中学部を東北学院中学校と改称。中学校長に出村悌三郎院長が兼務(4月)。
1944(昭和19)年		航空工業専門学校設置。航空工業専門学校長に宮城音五郎就任(4月)。第5代理事長に杉山元治郎就任(6月)。



年 代	歴代役職者	事 項
1945(昭和20)年		中学校長に出村剛就任(4月)。航空工業専門学校を工業専門学校と改称(12月)。中学校校舎空襲により焼失。
1946(昭和21)年	宮城音五郎	高等商業部および同第二部を廃止(3月)。東北学院専門学校(英文科・経済科)および同第二部を設置。第4代院長に出村剛就任。中学校長に月浦利雄就任(4月)。専門学校長に出村剛就任(4月)。
1947(昭和22)年		工業専門学校廃止。新制中学校設置。専門学校校舎木造2階建4教室増築完成。第6代理事長に鈴木義男就任(7月)。
1948(昭和23)年	杉山元治郎	新制高等学校、同第二部を設置。月浦利雄同高等学校長ならびに中学校長兼任(4月)。専門学校長に小田忠夫就任(4月)。
1949(昭和24)年		東北学院専門学校から新制大学に昇格。東北学院大学文経学部(4年制、英文学科・経済学科)を設置。小田忠夫初代学長に就任。東九番丁寄宿舍完成。
1950(昭和25)年	出村剛	専門学校二部を東北学院短期大学部(2年制、英文科・経済科)と改称。第5代院長にA.E.アンケニー就任(3月)。
1951(昭和26)年		「学校法人東北学院」と改組。専門学校を廃止。短大別科を設置。第6代院長に小田忠夫就任。中高理科教室鉄筋コンクリート3階建完成。
1952(昭和27)年	月浦利雄	短期大学部に法科を設置。
1953(昭和28)年		中学高等学校分離、中学校長に五十嵐正躬就任(4月)。総合運動場を多賀城市に開設。シュネーダー記念東北学院図書館完成(10月)。
1954(昭和29)年	鈴木義男	多賀城第2寄宿舍完成。
1955(昭和30)年		創立70年記念式典挙行。中学校校舎鉄筋コンクリート造3階建9教室完成。『東北学院創立七十年写真誌』を刊行(5月)。在米同窓生、創立70年記念として鐘を寄贈(12月)。蔵王にTGヒュッテ「栄光」完成。
1956(昭和31)年	A.E.アンケニー	中学・高等学校体育館完成(3月)。W.E.ホーイ碑、出村悌三郎墓を北山墓地に建立(4月)。大学音楽館完成(10月)。
1958(昭和33)年		中学校赤レンガ校舎は都市計画により9教室を失う(4月)。中学・高等学校鉄筋コンクリート造4階建8教室完成(4月)。大学体育館「アセンブリー・ホール」完成(9月)。
1959(昭和34)年	小田忠夫	中学高等学校一本化、中学校長に月浦利雄高等学校長兼務(1月)。短期大学部を東北学院大学文経学部二部(英文学科・経済学科)に改組。高等学校榴ヶ岡校舎を開設。『東北学院七十年史』を刊行(7月)。大学研究棟鉄筋コンクリート造4階建完成(9月)。自然科学研究室青根分室を開設(10月)。
1960(昭和35)年		短期大学部を廃止(3月)。
1961(昭和36)年	五十嵐正躬	文経学部英文学科に専攻科を設置。
1962(昭和37)年		多賀城町(現多賀城市)に東北学院大学工学部(機械工学科、電気工学科、応用物理学科)を設置。同校地に東北学院幼稚園を開設。初代幼稚園長に小田忠夫院長が就任(4月)。
1963(昭和38)年		押川記念館完成(2月)。工学部寄宿舍開設。大学オーディオ・ヴィジュアルセンター完成。野間記念剣道場完成(7月)。第7代理事長に杉山元治郎就任(9月)。



年代	歴代役職者	事項
1964(昭和39)年	 山根篤	東北学院大学文経学部一部・二部を文学部一部・同二部および経済学部一部・同二部に改組。大学院文学研究科英語英文学専攻修士課程を設置。大学64年館完成(10月)。第8代理事長に山根篤就任(11月)。
1965(昭和40)年		東北学院大学法学部(法律学科)および大学院経済学研究科財政金融学専攻修士課程を設置。宮城郡泉町市名坂字天神沢(現仙台市泉区天神沢)に10万坪の校地を取得(5月)。同窓会にTG十五日会発足(7月15日)。工学部4号館完成(10月)。中学校新校舎、中高礼拝堂完成(11月)。大学土樋寄宿舎完成。
1966(昭和41)年		大学院文学研究科英語英文学専攻博士課程、工学研究科応用物理学専攻修士課程を設置。創立80周年記念式典挙行。大学66年館完成(6月)。大学泉寄宿舎完成。青根セミナーハウス完成。
1967(昭和42)年		工学部に土木工学科を増設。中学・高等学校運動部室完成(3月)。大学院経済学研究科財政金融学専攻修士課程を経済学研究科経済学専攻修士課程に改組。大学67年館完成(5月)。中学・高等学校向山寄宿舎開設。
1968(昭和43)年		大学院経済学研究科経済学専攻博士課程、工学研究科応用物理学専攻博士課程を設置。工学部5号館・6号館完成(3月)。中学・高等学校弓道場完成(3月)。大学新研究棟68年館完成(8月)。『東北学院大学学報』第1号創刊(10月)。
1969(昭和44)年		工学部旭ヶ丘寄宿舎開設。第9代理事長に月浦利雄就任(4月)。
1970(昭和45)年		工学部校地に東北学院プール完成。
1971(昭和46)年	 二関敦	大学院工学研究科機械工学専攻修士課程、電気工学専攻修士課程を設置。倉石ヒュッテ完成。中学高等学校長に二関敬就任(9月)。榴ヶ岡高等学校長に五十嵐正躬就任(9月)。大学文団連棟焼失(9月)。
1972(昭和47)年		榴ヶ岡高等学校として独立(4月)。高山セミナーハウス完成(7月)。泉市市名坂(現仙台市泉区天神沢)に榴ヶ岡高等学校校舎が完成移転(8月)。榴ヶ岡高等学校体育館完成(12月)。
1973(昭和48)年		東北学院同窓会館完成(4月)。米国アーサイナス大学に第1回夏期留学生を派遣。中学・高等学校寄宿舎完成。幼稚園長に渡辺平八郎就任(7月)。
1974(昭和49)年		大学院工学研究科機械工学専攻博士課程および電気工学専攻博士課程設置。第10代理事長に小田忠夫就任(3月)。
1975(昭和50)年		大学院法学研究科法律学専攻修士課程設置。大学67年館増築完成(6月)。
1976(昭和51)年	 田口誠一	創立90周年記念式典挙行。
1977(昭和52)年		中学・高等学校長に田口誠一就任(4月)。榴ヶ岡高等学校長に小田忠夫院長兼任(4月)。
1978(昭和53)年	 清水浩三	大学90周年記念館完成(2月)。榴ヶ岡高等学校長に清水浩三就任(4月)。中学・高等学校赤レンガ校舎、宮城県沖地震のため一部倒壊(6月)。TGヒュッテ焼失(8月)。ラーハウザー記念東北学院礼拝堂(土樋キャンパス礼拝堂)に新パイプオルガンを設置(11月)。
1979(昭和54)年		大学院法学研究科法律学専攻博士後期課程を設置。工学部計算センター完成(3月)。中学・高等学校赤レンガ校舎見送り式(3月)。大学78年館および部室棟完成(9月)。蔵王TGヒュッテ再建(10月)。東北学院展開催(十字屋仙台店・10月)。
1980(昭和55)年		中学・高等学校シュネーダー記念館完成(3月)。工学部機械工場および機械実験棟完成(3月)。榴ヶ岡高等学校礼拝堂および北校舎完成(8月)。泉校地総合運動場および管理センター完成(9月)。中学・高等学校文化部室完成(9月)。

年 代	歴代役職者	事 項
1981(昭和56)年	 情野鉄雄	大学81年館完成(3月)。『東北学院報』発刊(東北学院大学学報を改称)(4月)。情報処理センター設置。総合運動場プール完成(5月)。榴ヶ岡高等学校第1回海外研修(8月)。工学部体育館完成(10月)。
1982(昭和57)年		米国アーサイナス大学と国際教育交流協定を締結。 <b>第7代院長・第2代大学長に情野鉄雄就任(4月)</b> 。第11代理事長に児玉省三就任(4月)。図書館工学部分館完成(11月)。
1983(昭和58)年	 児玉省三	高校第二部廃止(3月)。榴ヶ岡高等学校校舎増築完成(3月)。工学部礼拝堂完成(10月)。
1984(昭和59)年		新シュネーダー記念図書館完成。高等学校第1回海外研修(7月)。
1985(昭和60)年		大学整備計画案(教養学部泉校地移転など)公表(1月)。旧シュネーダー記念東北学院図書館を大学院校舎に改装(11月)。 <b>幼稚園新園舎完成(12月)</b> 。
1986(昭和61)年	 宗方司	<b>創立100周年記念式典挙行</b> 。米国フランクリン・アンド・マーシャル大学と国際教育交流協定を締結。榴ヶ岡高等学校北校舎増築完成(3月)。
1987(昭和62)年		中学・高等学校長に宗方司就任(4月)。榴ヶ岡高等学校長に半澤義巳就任(4月)。中学・高等学校体育館武道館完成(12月)。
1988(昭和63)年	 半澤義巳	<b>大学泉キャンパス完成、大学教養部を移転</b> 。榴ヶ岡高等学校礼拝堂増築完成(3月)。幼稚園長に橋本清就任(4月)。
1989(平成元年)		<b>泉キャンパスに教養学部(教養学科人間科学専攻・言語科学専攻・情報科学専攻)を設置</b> 。幼稚園長に新妻卓逸就任(4月)。『東北学院百年史』発刊(5月)。
1990(平成2)年		大学院工学研究科土木工学専攻修士課程を設置。
1991(平成3)年	 武藤俊男	多賀城キャンパス1号館完成(3月)。榴ヶ岡高等学校部室棟完成(3月)。中学・高等学校長に武藤俊男就任(4月)。中学・高等学校社会科教室完成(7月)。
1992(平成4)年		大学院工学研究科土木工学専攻博士後期課程を設置。榴ヶ岡高等学校柔道・剣道場および校舎増築完成(4月)。第12代理事長に情野鉄雄就任(6月)。法学政治学研究所を設置。
1993(平成5)年		工学部2号館完成。中学・高等学校移転決定(3月)。
1994(平成6)年	 倉松功	大学院人間情報学研究科人間情報学専攻修士課程を設置。
1995(平成7)年		榴ヶ岡高等学校を男女共学制に移行。 <b>第8代院長に田口誠一就任。第3代大学長に倉松功就任(4月)</b> 。人間情報学研究所を設置。
1996(平成8)年	 脇田睦生	大学院人間情報学研究科人間情報学専攻博士後期課程を設置。榴ヶ岡高等学校家庭科実習棟完成(2月)。榴ヶ岡高等学校長に脇田睦生就任(4月)。榴ヶ岡高等学校第1回ホームカミングデー実施(9月)。
1997(平成9)年		大学院文学研究科ヨーロッパ文化史専攻修士課程、アジア文化史専攻修士課程を設置。工学部運動場等新設。
1998(平成10)年		幼稚園長を田口誠一院長が兼務(4月)。高山セミナーハウス閉鎖。
1999(平成11)年		大学院文学研究科ヨーロッパ文化史専攻博士後期課程、アジア文化史専攻博士後期課程を設置。 <b>大学設置50周年記念式典を挙行</b> 。青根セミナーハウス閉鎖。第13代理事長に田口誠一就任(4月)。



年 代	歴代役職者	事 項
2000(平成12)年		文学部英文学科、経済学部経済学科と商学科に昼夜開講制を導入。文学部二部英文学科と経済学部二部経済学科は募集停止。幼稚園長に長谷川信夫就任(4月)。土樋キャンパス8号館(押川記念ホール)・体育館完成(9月)。大学第一回ホームカミングデー(同窓祭)開催。大学設置50周年記念事業(講演会・シンポジウム・シンボルマーク決定)を実施。仙台市宮城野区小鶴地区に中学・高等学校移転校地取得(3万1千坪)。
2001(平成13)年	 出原 莊三	文学部基督教学科をキリスト教学科に、経済学部商学科を経営学科に、教養学部教養学科言語科学専攻を言語文化専攻に改称(4月)。東北学院資料室開設(5月)。東北学院シーサイドハウス完成。
2002(平成14)年	 杉本 勇	工学部機械工学科を機械創成工学科に、電気工学科を電気情報工学科に、応用物理学科を物理情報工学科に、土木工学科を環境土木工学科にそれぞれ改称。大学院経済学研究科に経営学専攻修士課程を設置。中学・高等学校長に出原 莊三就任。榴ヶ岡高等学校長に杉本勇就任(4月)。
2003(平成15)年	 赤澤 昭三	第14代理事長に赤澤昭三、 <b>第9代院長および同窓会長に倉松功就任(4月)</b> 。幼稚園長に長島慎二就任(4月)。東北学院同窓会100周年記念式典挙行(11月)。
2004(平成16)年	 星宮 望	法科大学院・総合研究棟完成(2月)。 <b>第4代大学長に星宮望就任(4月)</b> 。中学・高等学校長に松本芳哉就任(4月)。大学院法務研究科法実務専攻専門職学位課程(法科大学院)を設置(4月)。榴ヶ岡高等学校校舎増築(4月)。
2005(平成17)年	 松本 芳哉	<b>中学・高等学校新校舎完成(仙台市宮城野区小鶴)(1月)</b> 。東北学院同窓会館閉館(3月)。文学部史学科を歴史学科に、教養学部教養学科人間科学専攻、言語文化専攻、情報科学専攻を教養学部人間科学科、言語文化学科、情報科学科に改組し、教養学部地域構想学科を新設(4月)。
2006(平成18)年	 久能 隆博	工学基礎教育センター完成(3月)。工学部機械創成工学科を機械知能工学科に、物理情報工学科を電子工学科に、環境土木工学科を環境建設工学科に改称(4月)。榴ヶ岡高等学校長に久能隆博就任(4月)。 <b>創立120周年式典挙行(5月)</b> 。
2007(平成19)年	 永井 英司	中学・高等学校新寄宿舎完成。ハイテク・リサーチセンター完成(3月)。 <b>第10代院長に星宮望就任(4月)</b> 。中学校・高等学校長に永井英司就任(4月)。秋田オープンキャンパス開催(7月)。多賀城市との連携協定締結式(11月)。
2008(平成20)年	 平河内 健治	第15代理事長に平河内健治就任(6月)。榴ヶ岡高等学校体育館・管理棟完成(9月)。教養学部創設20周年記念式典挙行・同窓会設立。
2009(平成21)年	 湯本 良次	経済学部経営学科を経営学部経営学科に改組、経済学部共生社会経済学科を新設(4月)。大学院経営学研究科(修士課程)を設置(4月)。幼稚園長に平河内健治兼任(4月)。榴ヶ岡高校創立50周年記念式典挙行(11月)。東北学院大学博物館開設(11月)。
2010(平成22)年		バイオテクノロジー・リサーチ・コモン棟を開設(3月)。東北学院発祥の地に記念碑建立(10月)。
2011(平成23)年		中学校・高等学校跡地に記念碑建立(3月)。文学部キリスト教学科を文学部総合人文学科に改組(4月)。幼稚園長に佐々木勝彦就任(4月)。
2012(平成24)年		榴ヶ岡高等学校長に湯本良次就任(4月)。工学部設置50周年記念式典挙行(11月)。





## 資料室利用案内

東北学院資料室は、広く一般の方々にも開放しております。

### 開室時間

#### 授業期間中

月～金 10:45～16:00

土 10:45～12:00

(日・祝祭日は閉室いたします。)

#### 長期休暇(夏休み・冬休み・春休み)中

月～金 10:00～15:30

(土・日・祝祭日は閉室いたします。)



## 学校法人 東北学院

発行日 2013(平成25)年4月1日

編集 東北学院資料室運営委員会

発行 学校法人 東北学院

〒980-8511

仙台市青葉区土樋一丁目3番1号

TEL.022-264-6423 FAX022-264-6478

<http://www.tohoku-gakuin.jp/>

印刷 株式会社東北堂





